INTERNATIONAL MRA ASSOCIATION OF JAPAN

IMAJ ニュース NO.67

(社)国際MRA日本協会機関誌

発行年月日　1992年7月20日
発　行　所　㈳国際MRA日本協会
〒113 東京都文京区千駄木4-13-4
TEL.03-3821-3737
FAX.03-3821-6479
発　行　人　住友 義輝
頒　　価　1部200円

●世界家族の仲間入り　●信頼できる人との出会い　●新時代に必要な情報　●心身の健康　●問題解決の秘訣

●リオネーズ・デ・ゾー・ドウメス社で開かれたパリの円卓会議

MRA海外レポート

コー円卓会議＝ヨーロッパキャンペーン

「日米欧-競争と協調」

――限界点に達した日米欧の競争――

●ロンドン、パリ●1992年2月17日～21日

コー円卓会議初のヨーロッパキャンペーンが、去る二月十七日から二十一日にかけて、ロンドンとパリで行われた。今回のテーマの「日米欧―競争と協調」は、九十年代の国際ビジネスの課題の本質を捉えたものであり、八月にスイスのコーで開かれる第七回コー円卓会議でも引き続き討議される予定である。

今回の主な論点は以下の通りであった。

(1)東欧諸国や新生の独立国家共同体（旧ソ連）が市場経済の導入に努めている今日、市場経済の倫理的、道徳的基盤を確立する重要性

(2)ガットのウルグアイ・ラウンドを成功裡に終結させる上で深刻な障害となっている諸問題を解決し、ガットを自由貿易を可能にする力として存続させることの重要性

(3)世界的に深刻化している失業と市場の入れ替わりという問題を軽減するために、日米欧の企業の姿勢、政策および貿易慣行を抜本的に解決する必要性

(4)二国間主義と地域貿易圏についての賛否両論

(5)多くの経済にとって鍵である自動車産業が提起する問題への対応

(6)東欧諸国、独立国家共同体、その他発展途上国の永続的な民主的解決、自由市場経済、雇用の拡大、富の創出を図るために、日米欧の企業が、これら諸国の支援を早急に行う必要性

(7)経済問題や雇用問題に加えて新たな問題となっている世界的な環境問題に対する、人道的で長期的な対応への投資の必要性

▼主な内容▲

◇コー円卓会議レポート
「日米欧―競争と協調」
＝ロンドン・パリ＝　1P
◇カンボジアレポート
「MRA国際チームの三名がカンボジアの首都プノンペンを訪問」　8P
◇MRAワールドニュース
―世界のMRA最近の動き―　11P
◇第46回コー世界大会のご案内　16P
◇MRAシンポジウム
「日本の役割　日本への期待」
＝アジアそして世界への貢献をどう考えるか＝　17P
○ハイメ・シン　○イナムラ・カーン　○ラジモハン・ガンジー　○石原俊　○曾野綾子　樺山紘一
メッセージ　○ダライ・ラマ14世　他三名
スピーチ　○瀧藤尊教　○石川洋　○サレハ夫人
◇一九九二年の主な活動予定　32P

(8)これらの問題の解決策を見つけるために必要なビジョン、イニシアチブ、グローバルな視点、総合的指導力を提供するというチャレンジを、産業界のリーダーたちが受け入れる必要性

会議が欧州で開かれたこともあって、共通農業政策(CAP)、英国における日本資本による際立った自動車生産など、EC域内の問題も討議された。

一、現状認識―欧州及び世界全般

我々は「憂慮の時代」に生きている。旧来の世界経済秩序は崩壊した。欧米の製造業の生産性の落ち込みにより、益々世界的不況が進行している。日本との貿易不均衡が問題を一層悪化させている。遺憾ながら、ジャパン・バッシングは最高潮に達している。歴史的に自由貿易擁護の旗手であった米国は、今や様々な形の管理貿易を求めているかのように見受けられる。欧米の産業界は、自由市場と規制撤廃を推進する一方で、不況時にあっては政府補助金など種々の保護を求めており、その貿易に関する視点は一貫性に欠けるか、あるいは二兎を追うような傾向を見せている。とはいえ、現行の貿易不均衡や高まる憎悪や緊張の理由が何であれ、方法や姿勢を変えて、新たな解決策の可能性を切り開くために何らかの手段が講じられなければならない。

日米欧の競争は限界点に達している。日本の貿易慣行はしばしば不公正であるとの意見は一部にはあるものの、日本は欧米を打ち負かした。欧米諸国が不十分な教育と有効な競争力の欠如という自らの問題に益々傾注する一方、日本は、安全で安定した調和のとれた世界の構築に貢献する成熟した国家としての新しい役割に直面している。

五十年にわたり、極めて非競争的で保護的ではあったが、産業革新の担い手でもあった軍事産業に代わる新たな推進役を見い出さなければならない。今や保護主義が世界経済を覆い、脅かす妖怪であり、米国が孤立主義と外国人嫌いに走らないようにするためには何をなすべきかを決めることが最大の課題である。

日米欧にとって地域の責任を負うことは極めて慎重な配慮を要することであり、地域貿易圏は関税を初めとする貿易障壁の排除を目的とするものが多いものの、貿易ブロックが長期にわたり成功した例はない。地域協力といっても、現在の熾烈な競争を考えると、希望的観測と言えるかも知れない。

今は競争のルールの大[illegible]な過渡期

●リオネーズ・デ・ゾー・ドウメス社のモリン・ポステル副社長（中央）その左は日本大使館小原参事官、右はロバート・ボッシュ社シップス監査役会役員（ドイツ）

●キヤノン賀来龍三郎会長（中央）と欧州パナソニック松本幹夫副社長（その左）

入会のご案内

(1)正会員　個人　年額　3、000円
　　法人　年額　50、000円

(2)賛助会員　個人　年額　1、000円以上
　　法人　年額　50、000円以上

郵便振替口座
東京八―三八二八九
口座名　社団法人
国際MRA日本協会

会員の皆様には、①内外のMRA国際会議やレセプションなどに参加して外国の方々と交流していただく機会の提供、②機関誌―MAJニュース等の送付、③講演会、月例会等のご案内を行なっています。

●世界家族の仲間入り
●信頼できる人との出合い
●新時代に必要な情報
●心身の健康
●問題解決の秘訣

事業の拡大と事務局基盤整備のために特別協力年会費制度一口50、000円(寄付扱い・年額)を設けました。ご協力頂ける方は資料を事務局までご請求下さい。

郵便振替口座番号
東京五―四一三六六五
口座名：社団法人国際MRA日本協会特別協力年会費

である。すなわち、緊張を緩和する鍵は、異なる国や文化における企業が拠って立つ基本的価値と責務を明らかにするという課題である。

参加者の一人は、世界中で長期にわたって深くまた広く浸透している失業は、人類全体の安寧を脅かすほど深刻であると述べた。この問題の解決に向け一層の努力がなされて初めて、世界全体が前進、発展できる。

二、米国の現状と姿勢

米国の参加者は、楽観と憂慮を交えて、米国の現状について説明した。教育、生産性、移民、貿易不均衡などの問題はあるものの、景気の後退は報告されているほど深刻ではない。しかし、保護主義、孤立主義、外国人嫌いが台頭してきており、大きな危険をはらんでいる。二国間貿易主義の台頭も見られ、これについてヨーロッパの参加者からは深い憂慮の念が表明された。多くの米国企業は、ヨーロッパ企業と同様に、これ以上の日本市場への進出の努力を断念した。

このような情勢を背景に、企業心理、消費者マインドは共に大幅に冷え込み、工場の閉鎖、労働者の一時解雇、伝統ある大企業の倒産などにより、一層悪化している。

「アメリカ的な生活の行き過ぎ」の証拠ともいえるもの＝例えば、本当の富や新規の雇用の創出にはつながらないことが多い投資金融業者や弁護士の供給過多、過剰な製品責任（PL）、知的所有権侵害の損害賠償請求、一般に訴訟好きな態度など＝が、問題をさらに悪化させ、解決を阻んでいると考えられている。米国は、経済の立直しよりは意志と自信の回復の方が遙かに必要であり、ボーダレスな視点から問題を捉えることができる産業界のリーダーこそ、これに対応する力を持っている。

三、日本の建設的改革の種

キヤノン賀来会長は、世界を噴火寸前の大火山に例えた後、日米欧には争っている余裕はないと述べた。企業ならびに国家の変革に関する同氏の抜本的な提案は、単なる理想主義や利他主義だけではなく実用主義に基づくものであることを明確にした。賀来氏は日本で、健全で調和のある世界の構築のために繁栄を共有するという新しい国策である「共生」に専心して取り組んでいる。

日米欧が協力して新興諸国を助けるためには、単に帳簿上の利益に終始するのではなく、真の[illegible]を創出し続けなければならないと警告した。

賀来氏の変革のビジョンは、いわゆるジャパン・バッシャーたちの指摘よりも深いところを目指している。賀来氏が推進する基本原則は、全世界の人々との調和のもとに共に生き、繁栄を共有することである。「富が日本を滅ぼし得る」こと、そして、日本が世界の一人前のリーダーになり、欧米と協力してより良い世界を創っていくためには、次の四つの変革が必要であるとの認識を示した。

(1)産業強化のイニシアチブを役所から民間へと転換する

(2)恩恵の対象を生産者から生活者へ転換することに重点を置く

(3)教育においては、技術よりは倫理人文および創造性を重視する

(4)政府の力の分権化を図り、官界と実業界の癒着を廃絶する

賀来氏の心情溢れる率直な発言は、自分の会社、国および世界に必要な変革について同様に明確で思い切った考えを生み出すことができるかということを、全ての参加者に考えさせるものであった。

●手前から住友エレクトリック・ヨーロッパ松本正義前社長と東芝欧州総括事務所小坂恕調査担当部長

●コー円卓会議創始者の一人オリビエ・ジスカールデスタン氏（フランス右端）とサッチャー前首相の政策委員会委員長を務めたブライアン・グリフィス卿（イギリスその左）

四、結論、提案、警告

今回の会議を通して、世界が抱えている深刻な問題に直面する中で、建設的かつ具体的な結論と提案が生まれた。

(1)修復が難しい意見の相違や強硬な議論は、基本的事実に関する認識や判断の違いから生じることがある。重要な事実関係を正確に把握することから予期せぬ結論が得られることも少なくない。例えば、英仏両国の自動車産業の代表の認識のギャップを埋めるためには、意見の分かれる次の二点に関する対話を行うべきである。

(a)ECにおける日本の投資によって生じる雇用問題に対する世界的なインパクト

(b)英国における日本車のローカル・コンテントのパーセント。認識のギャップは25%から84%に及ぶ

(2)コー円卓会議はメンバー相互による分析、診断および討議を重ね、それぞれの影響力の範囲内でのイニシアチブに期待するだけで終わってはならない。それも重要ではあるが、行動と解決策も目指すべきである。その第一歩としては、声明文を準備することから始める。それには次の三点を盛り込む。

(a)グループの基本的価値観

(b)新しい経済社会秩序に必要な企業指導者の基本的役割に関する哲学

(c)世界の自由市場経済において、活気ある公正な競争を維持しながら新しい協力関係を見い出すという「日米欧の企業による責任」

(3)必要な日本の変革と、世界において益々増大する企業の役割に関する賀来氏の見方は、欧米人が日本に関して抱いている一般的見方とは極めて異なっており、これをより広く知らせるべきである。コー円卓会議は、より良き安定した世界を築くために日本がその経済や教育システム、文化を使して貢献することを、日本人の責任感と名誉に訴える形で支援すべきである。

(4)東欧の政治改革は経済改革への扉も開いた。ビジネス界はこの歴史の好機を捉え、緊急の課題としてこれに取り組むべきである。もしこの地域に対するアプローチが、主に協調よりも競争という形で行われるのであれば、公正な貿易に関する基本ルールが作られるべきである。

こうして希望の持てる前向きなステップが見い出された一方、会議では重苦しい現実の空気も漂った。あるフランスの社長は、非難からは何も生まれないことを認めながらも、現在のようなインバランスが存在しては非難は収まらないと述べた。日本企業は、それが極めて難しく、国の進路や文化の変化まで強いられることになっても、これまでのやり方に何らかの軌道修正を行うことが求められている。彼は日本経済を「素晴らしき戦闘マシン」と評し、この日本の成功は他国の企業と経済全体に激しいダメージを与えていると述べた。もしこの流れが止められなければ、手荒い保護主義的反発の脅威が増大する。単に倫理的・道義的側面ばかりでなく、互いの存亡という側面からも、革命的な変革が望まれている。

この報告の末尾に記されているように、自動車産業の問題に関連した日本の競争が公正が否かといった議論は、コー円卓会議の存在価値をはっきりと物語っている。責任ある経営者同士の論議であっても、緊張が生じたり異なる前提や認識に基づいた議論にエスカレートしうる。しかし、日本が激しい競争を中休みすることが果たして全ての国々の利益になるのか、という疑問も出された。欧米側にとっては競争力を再検討す

●フランス経営者評議会（CNPF）で発言するプジョー社のバートラン・プジョー取締役（フランス）

ると共に、教育制度を改善したり、ホームレス、犯罪と麻薬といった国内問題に取り組み、さらには古くなった産業を保護するよりも新たな富の創造に役立つような将来を展望した産業構造の改革に取り組む機会を得ることになる。日本側は生活水準を上げると共に、増大している過労死などの問題に積極的に対応することができる。

外部から、日本に対してその文化やアイデンティティの変化を迫れるのか、という道義的問題が存在することも指摘された。しかし、三極とも「世界市民」として地球的見方をとるべきであることは感じられた。経済支配を望む国が存在しなければ、各国とも自らの狭い利益を越えた考え方をお互いから期待できる安定した世界作りに励むことが、成功の鍵となる。

会議は確かな答えを得ることはできなかったが、このグループの目指すゴールはより明らかとなった。そして抜本的な改革に対する責任を担う用意のあるビジネスリーダー同士では、深刻な問題も新しい方法で効果的に話し合えることが分かった。現実的には三極間や南北間のギャップを完全に埋めることは不可能であるが、緊張関係を対応可能な程度まで和らげ、正当な競争に基づく国際協力の新しい方向性、プロセス、姿勢、「共通の善」に関する世界的な視点が確立できる程度までギャップは縮められなければならない。コー円卓会議は、企業が新しい世界経済秩序を形成する原動力となるために、充分な数の企業が賀来氏の唱えるような、環境や紛争解決などの世界的問題に積極的に取り組む第五種の企業へと進化できるための触媒役を果たすべきである。これを達成するには企業は活動の量的側面ばかりでなく、質的側面にも焦点をあてなければならない。

八月の会議はコー円卓会議にとって、より明確な結論を出して共同のイニシアチブを決定する良い機会となりうる。それには共通の理念をパブリックに表明することや、産業界や国と国との間で新しい考え方や政策を生み出すコミュニケーションを確立することも含まれる。

五、自動車問題に関する討議（パリ）

「フェアな貿易とは何か」ということを定義する難しさは、世界の自動車産業問題に関する議論にはっきりと現われた。日本の自動車産業からの参加者はなかったが、貿易インバ

SEAC 東南アジアを伝える雑誌です

東南アジア通信をぜひ御一読下さい。

右記に御連絡ください。

お電話、または御郵送でもけっこうです。

東南アジア通信 季刊 年4回発行

B5版 90P 定価750円

■定期購読■ 年会費 3200円

■■賛助会員■■年会費 5000円

東南アジア通信

The South East Asia Correspondence

同時代の東南アジアを——

「アジアの時代」と言われる21世紀。この「アジアの時代」の幕開けに、私たちは真に応えられるでしょうか。

●東南アジアの個々の顔と●

アジアは豊饒ゆえに多様です。それぞれの国にそれぞれの顔があり、それぞれの地域にそれぞれの息づきがあります。一つ一つの顔とじっくり向かい合い、その息吹を受け止める感性が、新たな時代の橋を作るはずです。等身大の人間どうしの理解が、いまこそ求められています。時代は私たちに問いかけています。一人一人の人間に、私たちは人間としていかに共感できるでしょうか。

〒158 東京都世田谷区奥沢7-15-13

TEL(03)5706-7847 FAX (03)5706-7848

ランスや国際的な軋轢に満足のいく解決をもたらすための自動車の重要性を認識した日本人参加者は、解決の糸口を求めて積極的に議論に参加した。フランスの自動車業界の代表と、この業界での経験が深いドイツの財界人が参加した。

「日本は、世界の貿易と投資にとって危険であり、かつ長期的なインバランスをもたらすことにつながる『世界を支配する経済力』となりうる能力と願望とを抱いているのではないか」という懸念が複数の参加者から表明されたが、これが問題の核心であった。

以下の対話に現われている好対照の見方に、世界貿易全体の本質的な問題が含まれている。

〈ヨーロッパ参加者〉

世界的な過剰生産の中で、低コストで多くの車種を生産できる日本のメーカーは、ヨーロッパの地元のメーカーを破壊すると恐れられている。言葉は文化に応じて異なる価値を持っているので、日本側の意図だけを表わす言葉に基づいて話を進めることはできない。日本の貿易黒字は、ヨーロッパとアメリカの赤字の合計にほぼ匹敵し、これは主に自動車関連の貿易による数字から成り立っている。日本からの投資によって創出された雇用は、アメリカのメーカーの衰退によって失われた職に比べて三十七万人分も少ない。これは主に、ローカルコンテントとして発表された数字（70％～75％）と、実際の数字（25％に近い）との差によるものである。アメリカやヨーロッパのメーカーは70％から75％の稼動率であるのに対して、日本では人手不足で全面稼動を行っている。この差はコストに大きなインパクトを与えている。こうした傾向は深刻な失業問題となっており、ひいては大きな政治問題と化している。

自由貿易を原則として唱えることはたやすいが、実際は日本の市場は閉鎖的である。有利な立場にある時に自由貿易を擁護するのは易しい。ECはヨーロッパの単一市場を形成しようとしているが、結果的にはこれも日本に差し出すことになる。ヨーロッパの自動車業界の利害関係は多様化している。日本からの投資の多いイギリスは、フランスやドイツに比べて異なる市場の様相を呈している。地場の自動車産業を持たない国々は、消費者の利益に焦点を合わせている。

今日政治的に最大の問題は失業である。現存する貿易秩序を破壊するよりも均衡を図る方が、自らの利益であることを、日本の財界指導者は認識すべきである。

〈日本参加者〉

諸国間の均衡と調和を維持することは重要であるが、日本の自動車市場はさほど閉鎖的ではない。日本の環境公害規制によって欧米車が手直しを必要とすることや、欧米で通常生産される車より小型の車が日本で必要とされていることが主な障害である。アメリカ車の日本市場参入の問題点は、性能、デザイン、価格である。どの車を購入するか最終的な決定は消費者が下す。日本の消費者にとっても芳しくない大きな問題は高い流通コストで、この問題は解決されなければならない。

〈ヨーロッパ参加者〉

欧米の主要メーカーは最早、日本へのまとまった量の輸出を諦めている。そして、むしろ自分の貿易地域を守るべきだと感じている。それは悪い解決法ではあるが、フェアな貿易の意味に関する広いコンセンサスが確立されるまでは必要かもしれない。

〈日本参加者〉

現在は日本が問題となっているが、将来は韓国、シンガポール、中国までも大きな問題となりうる。

〈ヨーロッパ参加者〉

ヨーロッパ市場での日本製品のダンピングが主要産業で起こっており、不公正な競争をもたらしている。ヨーロッパは社会制度維持のため、低コスト、長時間労働、限られた社会保障で働く国々から自らを保護せざるを得ない。日本の環境公害規制はしばしば外国車の輸入を妨げるために設けられている。日本における販売網は日本のメーカーによって支配されている。こうした販売ルートに近づくためには、外国メーカーは日本のメーカーの合意を取り付ける必要がある。

〈日本参加者〉

この問題はよく分かる。なぜなら二十年前には、我々日本の電機メーカーがフランスに輸出するためにはフランスのメーカーの合意を取り付ける必要があった。具体的に提案するならば、日本では地方における販売網コストは大都市に比べてかなり安い。これを開発することと、販売価格を多少でも安くすることによって市場のシェアはかなり増やせるは

ずだ。

〈ヨーロッパ参加者〉

日本と欧米との間では雇用のインバランスが深刻なので、西側企業が日本と同レベルに達するまで日本との激しい競争を一旦中休みしてもらう必要がある。この間に日本企業は、労働時間の短縮や生活の質の向上に重点を置くことを検討してはどうか？

〈ヨーロッパ参加者〉

日本が不公正な競争をする場合は、日本に対して決して弱腰になってはならない。しかし、我々も不公正な競争を行ったことがあることも認識する必要がある。もしそうした行為が深刻な影響を及ぼしているようであれば、変える必要がある。貿易活動は次の三つの基準からチェックされるべきである。

(1)それらは正直かつ合法的であるか？　もしそうでなければ対応措置が強化されるべきである

(2)それはまた公正であるか？　これは構造と姿勢の両面で改善を要する

(3)それらは政治的に受け入れられるか？　この点の配慮から自主規制に至ることがあるが、これは外から課せられる規制よりも効果的で負担が少ないことが多い

もし充分なローカル・コンテント、地元のR&D、そして地元の人々による経営が相当行われているのであれば、日本の自動車メーカーがイギリスで現地生産して何が悪いのだろうか？

〈ヨーロッパ参加者〉

消費者にとって最良の利益になるものが勝つということが、自由貿易の原則であることは確かだが、それは公正な競争という枠の中で行われるものでなければならない。ヨーロッパの日系自動車企業は所期の目標の市場シェアを獲得するまでは赤字覚悟で操業する仕組みになっていて、親会社がその赤字を埋めているというのは本当か？

〈日本参加者〉

全ての企業は利益を上げることを第一義としており、しかも社内間の価格差制限を規定した法律条項の実施もあり、そうしたことは仮に存在しても長続きするはずがない。

（終）

コー円卓会議ヨーロッパキャンペーン参加者リスト

一九九二年二月十七日～二十一日

■ヨーロッパ

オリビエ・ジスカールデスタン　（フランス）
ヨーロッパ経営大学院副理事長

モーリス・ファミール　（フランス）
ティムケン・ヨーロッパ・アフリカ・西アジア社長

フレデリッヒ・バウアー　（ドイツ）
MST社社長、シーメンス社元取締役

ラインハルド・フィッシャー夫妻　（ドイツ）
ブランコ社社長

クルト・シップス夫妻　（ドイツ）
ロバート・ボッシュ社監査役会役員

フレデリッヒ・ショック　（ドイツ）
ショック社社長

ネビル・クーパー　（イギリス）
トップ・マネジメント・パートナーシップ会長

フランク・ペチオリ　（イタリア）
英国アンプロゼッティ社社長

アクセル・イベロート　（スウェーデン）
アドバンスト・インターナショナル・マネジメント社会長

■アメリカ

ジェイムズ・モンゴメリー
パンナム・ワールドサービス元会長

ジョン・チャールストン
チェイスマンハッタン銀行常務

■日本

賀来龍三郎　キヤノン会長

小坂　恕　東芝欧州総括事務所調査担当部長

松本　正義　住友電工自動車企画部長

松本　幹夫　欧州パナソニック副社長

■イギリス参加者（ロンドン円卓会議）

セドリック・ブラウン
ブリティッシュ・ガス専務

カルデコット卿
インベスターズ・イン・インダストリー社元会長

デルタ・メタル元会長

ジョン・コックス
化学工業協会理事長

ノーマン・デービス
ブリティッシュ・アメリカン・タバコ社元取締役

グリフィス卿
ゴールドマン・サックス・インターナショナル取締役
（元首相政策委員会委員長）

デビット・ハーディ
ロンドン・ドックランド開発会社会長

フランク・ハートリー教授
クランフィールド・ビジネススクール学長

ケビン・ケネディ　英国フィリップス会長兼社長

マーチン・レイン　ジョン・レイン社会長

チャールズ・マッカイ　インチケープ社社長

ピーター・モルガン
インステチュート・オブ・ダイレクターズ理事長

アン・ロビンソン博士
インステチュート・オブ・ダイレクターズ政策部長

フランク・ペチオリ
英国アンプロゼッティ社社長

EC社会経済委員会産業部長

ジョン・スクレイター
シェル国際石油元取締役

フォーリン&コロニアル社会長

ヒル・サミエル社副会長

山一インターナショナル副会長

ジョン・リーブ　サン生命保険社長

■フランス参加者（パリ円卓会議）

ロジェー・シポ
全国金融協議会会長

ルイ・デション　銀行家

ジョン・ル・デルセ
金融コンサルタント

ダニエル・ドメル
大蔵省監査局長

マーク・モンドロー
フランス経営協議会国際関係・貿易交渉部長

クリスチン・モレ・ポステル
リオネーズ・デ・ロ・ドメ社副社長

ジョン・クロード・ムレー　パリ商工会議所理事

バートランド・プジョー　プジョー社取締役

カンボジア・レポート

MRA国際チーム3名がカンボジアの首都プノンペンを訪問

＝カンボジア子供教育基金（CCEF）支援のため＝

■1992年2月4日～9日■

報告：㈳国際MRA日本協会専務理事 藤田幸久

去る二月四日から九日にかけて、MRA国際チーム三名（レニー・パン夫人［カンボジア］、スチーブ・デイッキンソン［アメリカMRA］、藤田幸久［MRA日本協会］）が、カンボジアの首都プノンペンを訪問した。目的は、荒廃したカンボジアの教育をMRAの理念で建て直し、和平後の国造りに役立てようというアメリカ在住のレニー・パン夫人（故ソティ・パン元副首相夫人）によるプログラムを支援すると共に、長年にわたり各国のMRAが行ってきた人材養成と信頼作りの動きを和平に生かす可能性を探るためであった。

一、ポル・ポト派難民との和解

一九八六年にスイス、コーのMRA世界大会に参加したパン夫人は、第二次大戦後の独仏和解に功績のあったイレーヌ・ロー夫人と会談後、自分の夫を殺したクメール・ルージュ（ポル・ポト派）を祖国の和解と統一のために許すことを決意した。その後、タイにあるクメール・ルージュの難民キャンプ（サイト8）を訪問し、恐る恐る聞き入る難民の前で、「今まで私はあなた方一人ひとりを憎んできました。八つ裂きにして、切り刻んでやりたいと思ってきました。しかし、その憎しみはカンボジアの和平に決して役に立たないことが分かりました。私はあなた方を許すことにしました。皆さんの中でも、家族を失った人や、何も知らずに苦しんだ人も多いと思います。これからは一緒にカンボジアのために努力を傾けましょう」と呼びかけた。ほとんどの難民が唖然として何も言えない中で、涙を流し始める人や、周りに気兼ねし、リーダーの目を恐れながらも前に歩み出て握手を求める人も出て、彼女は初めてクメール・ルージュの心に触れることができたという。

二、カンボジア子供教育基金（CCEF）の設立

パン夫人は、カンボジアの再建は人造り、つまり教育にかかっていると考えた。ポル・ポト支配の時代（一九七五年～七八年）には官吏、技術者、弁護士などのインテリの他、教授や牧師、さらには仏僧までも多く殺され、その後、ベトナムによって樹立されたヘン・サムリン政権下でも満足な教育が施されないまま今日に至っている。一方、タイ領内の難民キャンプに在住する難民の四十％近くが幼児期までに国を離れたか、キャンプで生まれた、いわば祖国を知らない人々である。

失われようとしている祖国の文化、アイデンティティー、そして道徳の再建が政治的、社会的環境の違いを越えて、カンボジアの一般民衆をまとめる共通の基盤になると認識したパン夫人は、その第一歩として、全くその需要が満たされていない教師の養成を始めることにした。タイの文部省の協力のもと、タイの学校で難民を教える教師の養成プログラムを数年間行ってきたが、これはカンボジア人自身によるカンボジアのための初めてのイニシアチブであった。そしてタイ領内の各派の難民キャンプで成功を収めたプロジェクトを、今度はカンボジア内で行おうというのが今回のカンボジア子供教育基金（CCEF）の試みである。

三、道義に基づいた和平と再建

ここ十年余にわたってスイス、コーのMRA世界大会を初め、小田原会議、オーストラリア、アーマの青年育成コース等に参加した様々な立場のカンボジア人は百人を超えると思われる。昨年十月のパリ和平会議成立後、多くの在外カンボジア人がプノンペン入りしたが、その中にはこうしたMRAの参加者が二十名ほ

ど含まれていた。

十年振り、あるいは二十年振りに帰国した人々は、故郷に帰り、生き残った数少ない肉親との久々の再会という劇的な体験をする一方で、故国が余りにも荒れ果ててしまい、まるで外国のようだと複雑な心境を語った。

昨年十二月二十一日、運輸大臣の汚職に抗議する数千人規模のデモが起こり、学生六人が死亡した。プノンペンでは今、土地、建物などの国有財産が民間に売却されている。国連、各国大使館、外国企業などがオフィスや家を買い漁り、土地が高騰し、地上げ屋も活発に活動している。

一方、ソ連、東欧からの援助がストップし、教員の給与は六ヵ月間未払いのままだ。仕事のない退役軍人の中には、野盗と化する者も多く、汚職と治安の悪化はますます進行している。

MRAに参加したことのあるプノンペン政府の人間は口を揃えて、医薬品、食料など緊急援助ももちろん必要だが、国民が団結して国造りに励むための信頼関係回復と道徳の再建を助けてほしいと訴えた。国連や援助団体が行う援助をハード面の援助だとすれば、人造りや道徳的価値観の回復のためのソフト面の援助がMRAに期待されている。

●プノンペン国立競技場体育館で仏教自由民主党（ソン・サン派）結成大会が様々な妨害を乗り越えて八千人を集めて行われた。米、英、仏、露、中、印、タイなど十ケ国の大使も参列した

●映画「キリング・フィールド」で主役を演じた医師ヘン・ノー氏は、ポル・ポト政権下で自らが過酷な労役を強いられた本物のキリング・フィールドを案内してくれた。寺院境内に収められた骸骨の前で

四、各派代表と意見交換

CCEFのプロジェクト並びに、和平に関するMRAの役割について各派の人々と幅広く意見を交換した。

【プノンペン政府】

コム・ソム・オル副首相、ヨス・ソン国家教育大臣、ハン・チュオン文化・情報・新聞大臣、マイ・サメディ厚生次官、ウク・キムアン首相府次官。

【シアヌーク派並びラナリット派】

ノロドム・シリラット殿下、トロン・メリSNC（最高国民評議会）官房長、レンシー・サム同派欧州代表夫妻、ユー・ホックリー同派プノンペン代表。

【ソン・サン派】

ソン・サン議長（元首相）、ソン・スーベール副代表、イエン・モリ事務局長、ヘン・モニチェンダ師（「サイト2」難民キャンプ寺院副管長）。

その他、ポル・ポト派のSNCメンバー、そしてアメリカ、オーストラリア、日本の外交官等とも会見できた。

五、シアヌーク殿下との会見

そして最終日の八日、フランス政府の援助で改修がなったばかりの王宮で、シアヌーク殿下（SNC議長）に謁見できた。北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）の金日成首席より派遣されたボディーガードに囲まれながら私たちを入口で出迎えた殿下は、カンボジア国連暫定行政機構（UNTAC）明石康代表の到着を心待ちにしていると述べた。

また、自分は子供や孫の多数をクメール・ルージュに殺されたが、彼らを排除して野に放ち争いが続くよりも、交渉に参加させて共に政治解決を目指す方が和平のためには遙かにベターな選択であることを強調した。それに応えてパン夫人が、クメール・ルージュを許した体験を語ると、殿下はしんみりとそれに聞き入った。アメリカのディッキンソン氏が、家庭の崩壊、教育の荒廃、指導者層のモラル低下で悩むアメリカはカンボジアの助けを必要としていると述べた。その謙虚な姿勢に殿下は感動の表情を見せた。

私が、一九四一年にカンボジアに

侵攻した日本軍が、タイと戦わずしてビルマとマレー半島に進攻するためにタイと妥協したことから、カンボジアの三州の一部がタイに割譲されたにもかかわらず、戦後、カンボジアが日本に対する賠償請求権を放棄してくれたことへの感謝を述べると、殿下は相好を崩して自分がその決定を下したと答えると共に、日本が正しい動機で復興援助をしてくれることを望みたいと述べた。また、昭和天皇がマッカーサー将軍に「自分はどうなろうとも国民を助けてほしい」と訴えたことが、将軍の日本に対する占領政策に影響を与えたこと、一九七八年に来日した鄧小平氏に陛下が、「私の責任です」と過去について謝罪したことを披露し、「和平に向けて内外から様々な圧力を受ける陛下が、それを乗り越え、国民を第一義とする指導性を発揮することを信じ、かつ期待している」と申し上げた。殿下はじっくりとそれに聞き入り、日本の皇室との長年にわたる親交に感謝を表明した。そしてCCEF並びにMRAによる和平に関するイニシアチブに歓迎の意を示した。

●王宮でシアヌーク殿下（左から４人目）と会見。（殿下の左隣から右に）レニー・パン、藤田幸久、スティーブ・ディッキンソン。プノンペン政権教育省次官、シアヌーク派、ソン・サン派の代表も同席

六、カンボジア語のビデオとパンフレットの作製

今回会った人々及び、在外カンボジア人の要請に応えて、こうしたイニシアチブに使うための各種MRAパンフレットのカンボジア語への翻訳及び、イレーヌ・ロー夫人の生涯を描いたビデオ「明日を愛するが故に」のカンボジア語版の作制が現在進んでいる。またこうした動きに併せて、和平を側面から援助するためのプノンペン訪問や会議の計画も進められている。

（事務局注：これらのプロジェクトへの寄付を受け付けています。希望される方はMRA事務局までご連絡下さるようお願いいたします）

MRAビデオのご案内

日本語吹替版
（VHS/ベータ）

明日を愛するがゆえに

――イレーヌ・ロー夫人の生涯――

頒価 5,000円
（郵送料サービス）

好評頒布中！

●イレーヌ・ロー

1898年生まれ。第二次大戦中、反ナチ抵抗運動の医療班を組織して闘った。三男をゲシュタポに拷問され、フランス人そして母親としてドイツとドイツ人を心から憎んだ。戦後間もなくスイスのMRA世界大会に参加したが、ドイツ人がいるのを見て直ちに帰ろうとした。しかし、ブックマン博士に「ドイツ人を除外してどうしてヨーロッパの融合と再建が出来るのか」と説得され、三日三晩寝ずに悩んだ末、ドイツ人を許し憎しみを謝罪した。その後、独仏間の関係改善に尽力し、後のEC設立のきっかけを作った。マルセーユ選出の国会議員や仏社会党中央執行委員等も務め、世界各国を訪れ融和を説いた。1987年、88歳で没する。

ドイツを仲間外れにして
ヨーロッパの再建ができますか？

独仏の歴史的和解は勇気ある
人々により始められ後のEC
設立の礎となった。

お申し込みは
MRA事務局へ 03(3821)3737

MRAワールドニュース

●世界のMRA最近の動き

メルボルン（オーストラリア）

第18回MRA青年スタディーコース「効果的な生活の実践」に14名が参加

●ミャンマー、カンボジア、フィジー、カナダ、イギリス、韓国、ドイツ、ニュージーランド、オーストラリアの9ヶ国の若者が共に暮らし学ぶ

●昨年インドで行われたスタディーコースの参加者とスタッフ

オーストラリア、ビクトリア州メルボルン市にあるMRAオーストラリア・太平洋センター「アーマ」で、二月九日から始まった九二年（第十八回）MRA青年スタディーコース「効果的な生活の実践」には、タイ、ミャンマー国境の難民キャンプから参加した二名のミャンマー人学生、タイ、カンボジア国境の難民キャンプ「サイト2」から参加した二名のカンボジア難民を初めフィジー、カナダ、イギリス、韓国、ドイツ、ニュージーランド、オーストラリアの計九カ国から十四名が参加しました。

コース第二週目にシェパートンを訪れた参加者たちは、果物産業に従事する人々と会い、果物加工工場で結ばれたSPCと呼ばれる新協定について説明を受けると共に、港湾労働組合委員長ジム・ベッグス氏の働きかけによって、組合と生産者の間に生まれた新しい協調関係についても話を聞きました。また環境に充分な配慮をしながら採算ベースで運営されている農場も訪れました。

第一週目の終わりに公開セミナー「機能的な地域社会の創造」がアーマで開かれ、ゲストスピーカーとしてイギリスから迎えたハリ・シュクラ夫妻とリチャード・ホーソン夫妻は、他民族コミュニティに対して心を開き、率先して行ってきた幅広い活動について自らの体験を基に語りました。そのセミナーにはメルボルン近郊の三市の市長の姿も見られました。

セミナーの司会を務めたトム・ラムゼイ氏とレジ・ブロウ氏から、白人とアボリジニー（注：オーストラリア先住民）である彼らの間に芽生えた信頼感、互いに耳を傾け学び合い、心を開くことの大切さが語られましたが、そのことは私たちがアボリジニーの歌手兼作曲家であるアーチー・ローチ夫妻の家庭を訪ねた際にも強調されました。妻のルビーさんは、「このドアを通って入ってきた全ての人が私たちの家族の一員です」と言って私たちを迎えてくれました。私たち一行二十六人はぎゅうぎゅう詰めになりながら、ローチ氏の話に耳を傾け歌を二曲聴きました。ローチ氏は、「私が変えたいと思うものは沢山あるが、先ず自分から変わろうとする時、それらも変わる。なぜなら私はそれらを違った視点で見ることができるからだ」と私たちに語りました。

金曜日の午後に、各参加者はそれぞれの社会や文化について五分間ずつスピーチしました。時にはユーモアを交えながら、深い経験と希望が次のように語られました。

「私たちは民主的社会に住んでいるが、沢山の犯罪と暴力がはびこっている。オーストラリアに住んでいることに誇りを持っているが、私たちがこれまでアボリジニーの人たちに対して行ってきたこと、そして今でも行っていることや、私たちの多くが移民に対して抱いている人種的差別観を恥ずかしく思う」（オーストラリア人）

「二回クメールルージュ（ポルポト派）に殺されかけたが、友人たちが強くかばってくれて助かった。現在、難民キャンプにある大きな中学校の教頭をしている。私は先ず道徳的価値を生徒に教えているが、それが私たちの教育にとって非常に大切だからだ。今こそ私たちは、各派に分裂するのではなく祖

国のために一丸となって働くべきだ」（カンボジア難民）

「多くの人々が西洋の文化を受け入れつつあり、伝統的大家族主義とケレケレ（分かちあい）の習慣が失われつつある。部族長の家庭出身のフィジー人として、フィジー人とインド人社会間の反目と、八七年のランブカ中佐によるクーデターに対してインド人に謝罪したい。一部のインド人もケレケレを学びつつあり、沢山の人たちが私の旅費を援助してくれた」（フィジー人）

「その謝罪を受け入れたい。私たちインド人もフィジー人の福祉に関心がなかったため、彼らの憎しみを助長した」（フィジー出身インド系オーストラリア人）

「私たちは大変礼儀正しく、物静かに愛想よく語る民族であったが、現在、陰口を言い合い、各派に分裂し、お互いを信用しなくなった。私たちは正面から堂々と話し合うべきであり、先ず私自身から始めることを決心した」（カンボジア難民）

「一九八八年以来、家族との連絡が途切れている。私の祖父は、民主的に選出された唯一のミャンマー人指導者だが、長年にわたり自宅軟禁下にある」（ミャンマー難民）

「信仰の自由、そして自らが信ずるものについて語ることのできる自由を感謝しているが、だからといって〝私たちはうまくやっている〟というような態度は好きではない。私たちの社会は、増大する離婚、子供の家出、そして十代の自殺という問題を抱えている。昨年、自分の学生時代の友人が二人自殺した。なぜこのように絶望的な状態に陥ってしまったのかが問われなければならない」（オーストラリア人）

【スタディーコースとは……？】

オーストラリアのMRAセンター「アーマ」と、インド、パンチガニーのMRAセンター、「アジアプラトー」を会場（一年交代）に、世界中の青年を対象に行われています。

コースでは時事問題、各国の歴史や文化、環境問題等、様々な講義やセミナーを受講したり、国籍や人種の異なる人々と寝食を共にし、「世界家族」の一員としての心構えや、今後の生き方の指針を学びます。また、世界各国の料理を作ったり、皿洗いやハウスキーピング、テニスコートやプールなどの施設の維持管理もグループに分かれて交代で行い、育った環境の異なる人たちとの効果的な共同作業の進め方も学びます。スポーツ、音楽、歌、ゲームの時間も豊富にあります。フィールド・ワーク（野外実習）では、参加者たちはオーストラリアやインド各地を訪ね、様々な人たちと交流し、社会問題の解決に取り組む人たちへの理解を深め、コースで学んだことの実社会での実践のヒントを得ます。

第一回スタディーコースは、一九七七年に開催され、今年で十八回を迎えました。日本からもこれまで三十名以上の青年たちが参加し、帰国後はそれぞれの分野でコースで学んだことを実践しています。スタディーコースのお問い合せはMRA事務局までどうぞ。

神戸（日本）

第14回MRA関西秋季大会開催

—全国各地から70名が神戸に集う—

テーマ

「これから何処へ？融和を求めてパート2
家庭・社会・自然そして世界を考える」

去る平成三年十月二十六日から翌二十七日まで、神戸の住友金属工業住吉研修所で第十四回MRA関西秋季大会が開催されました。

「これから何処へ？融和を求めて求めてパート2」家庭・社会・自然そして世界を考える」というテーマの下、地元関西はもとより関東、そして九州MRA協力会より派遣された七名を含む七十名近くが参加し、六甲山麓の静かな緑と爽やかな風の中で、心を開いた話し合いがなされました。

一日目の全体会議では、ゲストスピーカーの青山学院大学教授ヒュー・ウイルキンソン氏のお話を皮切りに、昨年のMRAコー世界大会や第二回台湾MRA国際青年キャンプの報告等も交えて、何名かの参加者から自らの体験を基にした率直な意見が披露され、会議の基調が自然に形成されました。

その後、参加者は三つの分科会に分かれての討議、夕食に引き続いて、ビデオ・ドキュメンタリー「ラジモハン・ガンジー、真実との出会い」を観賞しました。夜は有志によるハワイアンの演奏及びフォークソング・コンサートが行われ、MRAソング「新しい世界」を一緒に歌ったり、懐かしい歌を聴いたり楽しい一時を過ごしました。恒例の喫茶コーナーでの交流も行われ、夜遅くまで熱心に語り合う姿が見られました。

二日目は、前日に引き続いての分科会で議論がさらに深められた後、まとめの全体会議が行われ、大会の全プログラムを無事終了しました。

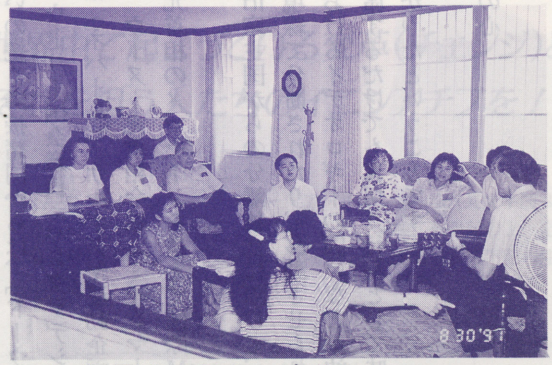
なお、昨年行われた関西月例会の内容は次の通りでした。皆様のご参加をお待ちしています。お問い合せはMRA事務局までどうぞ。

一月　「一日本人の心」新井正明氏　（住友生命保険相互会社名誉会長）
二月　「国際化の時代と日本文化」　和佐隆弘氏（日本経済新聞論説委員）
三月　「私の体験とマレーシアの現状」　プシュパ・パナダムさん（千葉大学留学生）
四月　「たとえ両手は無くても」　南正文氏、石川洋氏（一燈園）
五月　「海上作戦について」　野尻勝馬氏（海上自衛隊海将補）
七月　「カナダ環太平洋会議に参加して」　住友義輝、美子ご夫妻
九月　「アジアを繋ぐもの、タイからのメッセージ」　五十嵐勉氏（東南アジア通信編集長）
十二月　夕食懇談会（三分間スピーチ）

（台湾）

アジア太平洋キャンプ（APC）台湾で今夏開催、日本からも参加の予定

テーマ
「共通の未来への架け橋-相互理解、癒やし
そして信頼作りのために」



●昨年の第二回台湾MRA青年キャンプの様子

アジアと太平洋を中心とする国々の青年が集い、アジアや世界の問題と自分たちの果たすべき役割を率直に話し合い、二十一世紀に向けて友情の橋を築いてきた台湾MR国際青年キャンプ（IYC）が、本年よりアジア・太平洋キャンプ（APC）と名称を改め、引き続き開催されます。

今回のテーマは、「共通の未来への架け橋―相互理解、癒やし、そして信頼作りのために」で、七月二十四日（金）から八月二日（日）まで、台中でのキャンプを中心に台湾各都市を訪れます。キャンプでは、講義やグループディスカッション、ワークショップ、自国文化の紹介、見学、訪問など、多彩なプログラムが組まれています。七月二十四日（金）から二十九日（水）までは台中、三十日（木）から八月一日（土）にかけて他の都市を訪れ、最終日の二日（日）には、一般の人々を交えた会議が予定されています。参加費用は、一日当たり40米ドル（四月現在約五千三百円）で、宿泊代、食費、交通費が含まれます。この他に会議参加事務費として別途一万円お支払いいただきます。使用言語は英語と中国語です。参加に関するお問い合せはMRA事務局までどうぞ。

「冷戦は終結しましたが、その間、陰に隠されていた長年にわたる様々な心の傷跡は未だ癒されていません。世界各地で台頭する民族主義、地域主義は、世界をさらなる紛争と流血に導いています。

私たちは過去に犯した過ちを無視することなく、しかし、過去に因われることもなく、国々の間に信頼と友情を築けないでしょうか。私たちの文化の相違と歴史の遺産は、共通の未来を作るためのプラスの力になれないでしょうか。

人生の目的を求め、社会と国の変革のために貢献したいと願う二十才から三十五才までの青年男女を歓迎します」（APC案内状より）

デリー（インド）

「平和と正義と秩序の回復を目指す対話と反省の一日」

●ダライ・ラマ法王、ガンジー上院議員による南アジア和平へのイニシアチブ

●ダライ・ラマ法王（右から二人目）とガンジー上院議員（右から三人目）

一、MRA国際ダイアローグからのひらめき

去る三月二日、インドの首都デリーのタージマハールホテルにて、「平和と正義と秩序の回復を目指す対話と反省の一日」と銘打ったセミナーが開かれました。これは昨年十一月に日本で開催されたMRA国際ダイアローグに参加したラジモハン・ガンジー上院議員が、ダライ・ラマ十四世のビデオメッセージに強く触発されたことがきっかけとなり、同じような試みを、アジアで最も紛争の多い南アジアから先ず始めようということで開催されたものです。

二、インドの紛争地域と隣接諸国の関係者が一堂に会す

会合は先ず、インドを代表する音楽家ウシュダット・アムジャド・アリカーン氏のサロードという楽器の演奏で始まり、参加者一同の心が静められました。インドの参加者は、国民会議派、ジャナタ・ダル、AICC、インド人民党（BJP、ヒンズー教急進派）、アッサム人民会議、J&K（カシミール独立派）、共産党などほとんどの政党を含む政治家、パンジャブ州のシーク教徒、カシミール州のイスラム教徒、北東インドの少数民族（アッサム人、ナガ族、カシ族）、そしてハリジャン（不可触民）を含む、インド国内のほぼ全ての地域紛争や対立の当事者が含まれていました。この他、「インディアン・エクスプレス」、「メインストリーム」、「ヒンズー」、「ヒンドスタン・タイムズ」、「センティネル」、「ジャンサタ」、「ニューヨークタイムズ」など有力紙の編集者、産業人、判事、弁護士、学者なども出席しました。

インドとの間で緊張やこぜりあいの続く隣接諸国からは、「ドーウン」紙のハルーン社主（パキスタン）、チャウドリー国会議員（バングラデシュ）、パンディー元通産・労働・社会福祉相（ネパール）、サルボダヤ運動企画部長ジエハン・ペレラ博士（スリランカ）、ウーヌー元首相令嬢（ミャンマー）が出席しました。日本からは福田赳夫元首相のメッセージを携えて国際MRA日本協会の藤田幸久が出席しました。

南アジアの紛争のほとんどが、旧宗主国からの分離独立に際して、同じ宗教や部族、種族の人々が新たな国境線で分断されたり、移動させられたことに根を発します。これに冷戦下におけるイデオロギーの闘いなどが油を注いだのです。今までは、相手方と同席するだけでも裏切り行為として味方側から襲われるほどの地域も少なくなかったということです。

三、平和、正義、秩序の鍵は慈悲の心

亡命先インドから愛と非暴力による紛争の解決を訴えてきたダライ・ラマ

十四世の講話に厳粛に耳を傾けた参加者は、以下のような建設的で率直な対話を行いました。

●我々インド人はすぐに「反発」し合うが、今日のように先ず「反省」に基づいた対話が必要だ

●対話をすると今までとは違った全く別の視点が発見できる

●南アジアにおいては、国としてのアイデンティティーよりも先ず自分の宗教、部族、種族がアイデンティティーとなる。民族国家ではなく、「村族国家の連合体」（マハトマ・ガンジー）になってしまっている。

●こうした意識を越え、全ての民族や人種が分断されることのない兄弟姉妹になることが必要だ

●長く辛かった冷戦は実際の戦争以上に多くの傷跡を残した

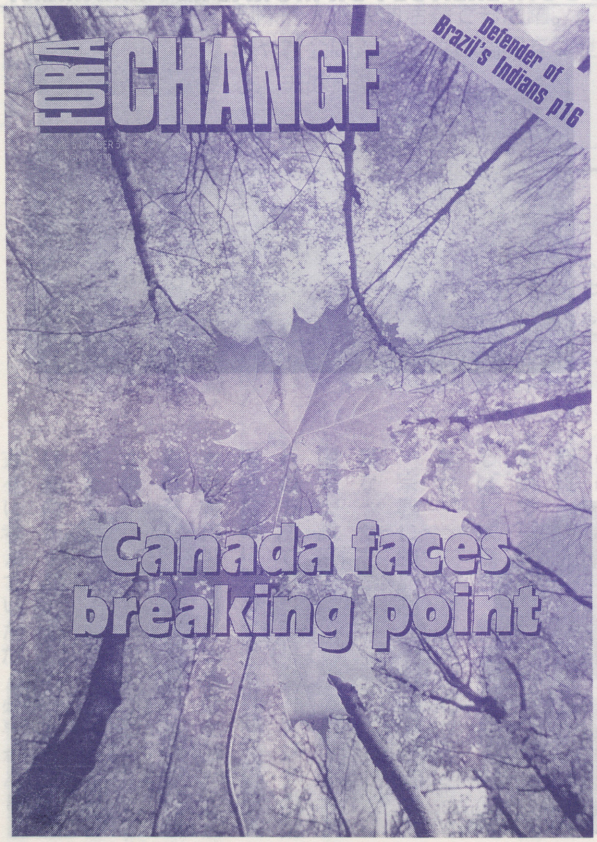
●しかし、今や問題は我々自身の問題であり、過去を越えて暴力に代わる方法を見い出していかねばならない

一日この対話を静かに聴いていたダライ・ラマ十四世は次のように締めくくりました。

「一人ひとりが自分の深い気持を語ってくれたことがよかったと思います。平和とは単に戦争が存在しないことではなく、それ以上のもの、人の気持と関連深いものです。その鍵は純粋な慈悲の心で、非暴力とはそれを行動に表わしたものです。一人ひとりの自制の心が世界の秩序の中で最善のもので、これが秩序の基本です。かくして、平和と正義と秩序の基本が慈悲にあることが分かります。

人類の中には様々な内面的資質を持っている人がいるので、より多くの宗教が存在したほうがそれを満たすと思います。こうした観点から私は他の宗教を以前にも増して理解し、尊敬し、親しみを感じるようになりました。非暴力は私が全面的に信じていることで、死ぬまで続けてまいります。こうした点で私が人類に貢献できることがあったら何でもお役に立ちたいと思います」。

参加者の総意で、ガンジー上院議員他数名が、インドとパキスタンの分離独立以来衝突が続いているカシミール地方へ対話の訪問を行った他、最近問題が頻発しているバングラデシュとその周辺諸国間の対話も検討されています。



MRAワールドニュースマガジン

IT'S ABOUT TIME...

FORA CHANGE

フォー・ア・チェンジ

定期購読受付中

世界中で起こっている変革（チェンジ）とそれを担う人たちのイニシアチブを！

MRAワールドマガジン「フォー・ア・チェンジ」誌（英文年間8回発行）定期購読ご希望の方は住所、氏名、職業、を明記の上、定期購読料（8回分＝¥4,500※郵送料込み）を現金書留にて下記の住所にお送り下されば、申込みを代行いたします。

〒113 東京都文京区千駄木4-13-4
社団法人 国際MRA日本協会
「フォー・ア・チェンジ」係

CAUX
1992

第46回MRAコー世界大会のご案内

●1992年7月3日(金)〜8月29日(土) ●スイス、コー、マウンテンハウス

メインテーマ「民主主義は自らの変革から始まる」

Democracy…starts with me

1992年MRAコー世界大会プログラム

開会式	7月3日(金)〜13日(月) 「障壁の打破、分裂の修復（多数派と少数派）」 —将来におけるヨーロッパの役割—
都市問題会議	7月15日(水)〜21日(火) 「都市の未来、＝人間的要因からの視点」
青年会議	7月24日(金)〜31日(金) 「壁を打ち破れ！」
教育、家族会議	8月3日(月)〜9日(日) 「変わりゆく世界の中で何を学び何を教えるか」 —モラルと精神的側面から—
地域問題会議	8月11日(火)〜17日(月) 「危機に直面する地域、危機から脱出しつつある地域—互いの体験に学ぶ」
産業人会議	8月19日(水)〜23日(日) 「市場経済に必要な道義的基盤」
コー円卓会議	8月22日(土)〜26日(水) 「日米欧—競争と協調」
閉会式	8月24日(月)〜29日(土)

INTERNATIONAL CONFERENCE FOR MORAL RE-ARMAMENT

マウンテンハウス

スイスのジュネーブから車で1時間半、眼下にレマン湖を望む標高1000メートルの村コー（Caux）にあるMRA世界会議場。毎夏、世界中から集まった何千人という人々が静かな環境の中で様々な会議に参加する。また、料理、サービング、皿洗いなどの共同作業を色々な国の人々と一緒に体験することによって、チームワークや心を開くことの大切さを身を以て学び、相手の身になって物事を考えられる心が養われる。

シンポジウム

「日本の役割 日本への期待」

ーアジアそして世界への貢献をどう考えるかー

MRA国際シンポジウム「平和と新秩序、アジアの貢献」が、91年11月27日、都ホテル東京で開催されました。ダライ・ラマ14世【ビデオ参加】、ハイメ・シン枢機卿（フィリピン）、イナムラ・カーン博士（パキスタン）、ラジモハン・ガンジー上院議員（インド）の基調講演に続き、日産自動車会長石原俊氏と作家の曽野綾子さんをパネリストに迎え、東大文学部教授の樺山紘一氏をコーディネーターとするパネルディスカッションが開かれました。その模様をお伝えします（共に要旨）。

パネリスト

石原 俊

日産自動車会長。社長在任中は積極的な海外戦略を展開。経済同友会代表幹事時代は歯に衣着せぬ直言を行った。

パネリスト

ハイメ・シン枢機卿

東欧の民主化にも影響した無血革命の精神的支柱。最年少枢機卿として登場以来、アジアの代表的キリスト教指導者。

パネリスト

曾野 綾子

作家。敬虔なカトリック教徒で、国際的人道救助活動でも活躍。政治や社会問題にも鋭い論評を寄せる。夫は三浦朱門氏。

パネリスト

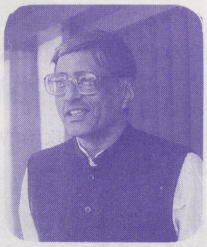
イナムラ・カーン博士

理性と寛容を重んずるイスラムの教えを説き、イスラム各派や他宗教との交流にかける「イスラムの移動大使」。

コーディネーター

樺山 紘一

東京大学文学部教授。西洋中世史、文化史専攻。東洋とのつながりや人物を通しての歴史を身近に伝えてくれる。



パネリスト

ラジモハン・ガンジー上院議員

民族、宗教の対立を超えたインド亜大陸の一括独立を目指した祖父ガンジーの遺志を継ぐ、ヒンズー教の良心。

平和と新秩序の在り方を問う

【樺山】

かつて東西対立が存在し、その谷間、もしくはいずれかの側について、道を選んでいる間は、判断は比較的容易だったが、今やそのような時代ではなくなった。日本人は国際社会の中で何を考え、どのような行動を取るべきかということについて、早急な結論、判断が求められている。

日本人は日本の進路の選択にあたっても、アジアの一員という意識を持たないことがしばしばであり、その結果、アジア諸国に対し、時には軽蔑、侮辱の行動を働き、あるいはかつて軍事的な侵略を行い、そして、しばしば無視、軽視の態度を取ってきた。

宗教に強い関心を持たない者も、異なった宗教を持つ者も、あるいは国家、政府、企業、団体も、それぞれの方法で世界の平和、アジアの繁栄のために努力をする可能性があり、また義務があるという話を伺った。それぞれの団体、国民がどのような立場に立ち、どのような分野で、どのような方法、スタイルで行っていけるのかということをパネリストの方々に考えていただく必要があると

感じた。

四大宗教を背景にした方々が、これからの新たな社会秩序、世界秩序の中で、人間の内面の道、精神的な価値の在り方、その重要性について大変印象的な言葉で述べ綴られた。経済力や政治力など様々な力と同時に、精神的な価値、内面の価値がこれからの世界平和や世界の諸民族の共生のために必要だということを改めて強く感じさせられた。

最も重要な価値は最も脆い

【シン】

「なぜ人が最優先されなければならないのか？　もしそれを否定すればどうなるのか？」という問いかけは私たちの確信を試すいい質問である。正直にそれに対峙すれば、その答えが決して易しいものではないことが分かる。

人や組織は、人の尊厳に対する哲学的裏付を与えることができるが、実用主義が支配する世界では、人の人道的価値は世俗的目的や野心の前ではほとんど立ちうちできない。最も重要な価値とは皮肉にも最も脆い。何故なら価値とは機能的ではない領域に存在するからだ。

価値とは良いから良いのであって、何かを起こすものではない。認識され、評価され、尊敬されるものであって、生産され、開発され、活用されるものではない。それらは支配されたり、操作されたりする環境では長くは生き残れない。最も重要な価値が成長するためには肥沃で温和な母体で育てられねばならない。

ここ三十年間にわたって、「貧しい人々の意識」と正義との連帯意識が世界中で顕著に高まったのは、歴史の偶然ではなく精神の働きによるものと信じる。

ラテンアメリカの兄弟姉妹が度々強調したように、「開放」という言葉が人権の新しい名前となった。そのことに世界中の善意ある方々は同意してくれるだろう。

与えられた人権に値する行動を

【カーン】

社会における尊敬や地位を得るものは、人そのもの、信仰、善行であり、金持ちだけが人権を有し、その他の人々は有しないという区別はない。こうした権利は人に内在するものだが、それを行使するためには、それに値することを自ら証明しなければならず、それは自分の日頃の善行しかない。良い隣人であるか、息子であるか、父であるか、兄弟であるか、生きている社会の良い市民であるかということだ。人権は要求することによってではなく、行動によって得られる。

協調的な世界を築くための道義的精神的基盤

人類の発展と文明に独自の貢献を果たしてきた、四大宗教を背景に日本に会した私達は、アジアの声を一緒に発信するものである。この声とは、人の魂は精神的な糧によってのみ養われるという、人の幸福の根本に関する真理である。

物質主義に根ざした社会哲学は、昨今その誤りが指摘されてきている。もはやこうした考え方では、人の必要を満たす社会の建設には役立たない。今や、民族や国家間の和解は急を要し、道義的精神的課題となっている。こうした状況にも拘らず、道義的精神的成長の機会を抑えようとする試みが存在することは極めて遺憾である。

21世紀を目前にした今、物質主義の哲学では、ダイナミックに成長を続ける地球社会が抱える挑戦や可能性に対応できないことは、一部の人々を除いては明らかであろう。今必要なのは、融和と思いやりのある社会を築くために新たな歩みを始めようとしている世界において、私達の生きた信仰の共通項をいかに活かしていくか、ということである。

こうした人類の要請に応えるべく、幾多の困難な時代を通して、国際連合のような世界的機関の活動も増大をみてきた。勿論、未だになされるべきことは少なくない。今後の最大の課題は、人の優れた創造的資質が自由に発揮され、個人や国のレベルでの利己主義を抑制できる新しい社会的、政治的、経済的文化の創造に、宗教がどのように貢献できるかにある。

良心の声に従い、正直、純潔、無私、愛という絶対的な基準に根ざした道徳を共通の基盤にすることによって、異なる宗教を背景に持つ私達が時代の要求に向かって手を携えて歩んでいけるというこの確信こそが、私達をこの意義深い会合に集わせたのであり、全人類の未来を照らすものであると信じるものである。

ダライ・ラマ14世

ハイメ・シン枢機卿

イナムラ・カーン博士

ラジモハン・ガンジー上院議員

MRA国際シンポジウムで4名の指導者が発表した「宣言文」
■日時：1992年11月27日(日)　■会場：都ホテル東京

樺山教授が指摘されたように、植民地主義時代の日本は多くの間違いを犯した。今日の日本が過去の過ちを認める勇気を持っていることは素晴しいことだ。唯一の救いはこうした過ちを繰り返させないことだ。神が私たちに地域や国を任せる機会を与えて下さるということは、そこの人たちの役に立つような力を発揮する機会が与えられているということだ。

アジア人自らが招いた民族対立

【ガンジー】

聖人や預言者がアジアに生まれたということは、アジア人がとりわけ善良で預言者をいただくにふさわしいのか、それともアジア人に欠点が多いが故に預言者と聖人を必要としていたのかと問いかけた。

西洋の国々がアジアに対して不公平、不当、あるいは横暴であった時期は確かに幾度かあったが、我々アジア人自身がアジアの分裂に荷担したことを忘れてはならない。今日アジアは民族対立の増加と激化に直面している。こうした対立には国内で起こっているものと、隣接国間で起こっているものとがあるが、共通することはそれを解決する能力が私たちになく、状況がますます悪化しているということだ。時の流れに、和解をもたらす術の進歩が伴わなかったからだ。アジア人としてこのことを真剣に考える必要がある。民族対立が悲劇と流血を増大させるのが分かっていながらなぜアジアの民族対立が解決されず、協定も守られないかを問い直さねばならない。

樺山教授が、今日暴力がしばしば宗教と関係している点を指摘されたが、自らの宗教を誇りにし、説いている私たちはこの点も直視しなければならない。宗教の名において憎しみに油が注がれ血が流されたというのはその通りだ。無論それは真の宗教でなかったことは事実だ。しかも、自分の信仰や宗教社会を愛しても、それが取り上げられたり人々の記憶に留められることはないのに対して、他の信仰や宗教社会を否定すると、取り上げられてそこから問題が始まる。

もう一つは人権の問題で、人権はアジアの、いや、世界中の多くの国々で侵害されている。政府が人権剥奪を行うケースと、暴力的なグループの人間が行うケースがあるが、共通点は、私たちは自国の人権問題よりも、他の国々の人権問題に対しての方がはるかに熱心だということだ。

世界の平和と安定と日本の役割

【石原】

日本は今後自らの経済発展を追求するだけでなく、その経済的地位にふさわしい世界の平和と安定、そして、それを裏付ける世界経済の安定的で調和的な拡大を維持することに積極的に貢献することが求められている。具体的に言えば、先ずアジア及び世界経済の安定的な成長の持続と、それを通じた経済的格差の縮小。二番目は、人類共通の課題に対する積極的な取り組み。三番目は、世界の安全保障体制構築への貢献に尽きる。

アジアにおいて経済的影響力が大きくなってきた日本の重要な役割は、アジアを世界に開かれた地域として貿易や投資を一層活発化させ、世界の成長センターとして発展させていくことだと思う。それが世界経済の持続的成長に貢献し、ひいては世界の経済的格差の縮小につながると考える。

現在、様々な業種の企業がアジアの各地で現地生産を行っている。それに伴って、アジアの労働者を日本に受け入れ、日本での技術指導、研修を通じて、現地経済の発展に資する人材を育成している企業も増えてきている。今後はこういう問題を企業だけに限らず、技術や医療を初めとして、学術、教育の分野でも交流を深めて、アジアの経済のみならず、文化、学術の向上にも貢献していくことが日本の責務ではないか。

日本が果たすべき役割の第二は、アジアを少し離れて人類共通の課題に対する取り組みを強化することだ。人類は現在、貧困、麻薬、環境、エイズ、自然エネルギー、また人口爆発など、非常に困難な問題を多く抱えている。中には一国だけでは解決が難しく、各国が協力して対処しなければならない問題も多くある。日本はこれらの問題のうち、特に貧困

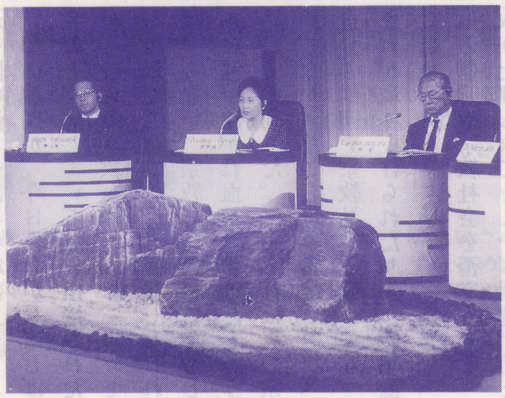
の撲滅、環境保全、それから省資源、省エネルギー対策、リサイクル問題等で主導的な役割を果たせるのではないかと考える。

日本が世界に誇る発言として、世界の先進国では日本だけが戦争の放棄、武器輸出の禁止、非核三原則を宣言している。これが世界、中でもアジアの平和と安定に向けてどのような貢献に結びつくかを、今後考えていかなければならない。

アジア人と言える日本人

【曾野】

アジアとは何かということについて話すように言われたが、自分がアジアに属しているアジア人であるということを認識することが、私にとっての大きな第一歩であったと思う。二十代初めに西はパキスタンまで旅行した時、自分はアジア人であるということをはっきりと自覚して、その立場をずっと失わずに今まで生きてきた。二十年ほど前、そのことをベイルートのPLOの事務所長にインタビューをした時に言ったら、「日本人で自分がアジア人だと言った人に初めて会った」と言うので、私は逆にびっくりして、「日本人というのはどこに属すると思っているのか」と言ったら、「ヨーロッパ人だと思っている日本人が多い」と言うので、また私は逆に驚いた。私は徹底してアジア人だと思っている。もちろんアジアは一つだということでは全くなく、各国各地域によって人間の心も、経済状態も、習慣も全て違う。しかし、問題は、個人であれ政治家であれ、非常に多くの人たちがアジアを飛び越えてどこか別の方向を見ていたということだ。しかし、私たちは足許から、きちんとした地盤を築いていかなければならないのではと思う。



アジアの諸地域の非常に美しい特徴の一つは、困った人が一族の中に出ると、その人を親族が助けるということだ。これには悪い面もある。全てのものには良い面と悪い面が必ずあるから簡単に評価することはできないが、貧乏になったり、病気になったりした困った人が出ると、その一族の中の最も幸運で豊かな人が自分の財力と、精神的な庇護をもってその人を生かすということを続けてきた。

アジアは世界の中産階級という感じがする。中産階級というのは非常に曖昧な言葉だし、アジアの多くの地域では中産階級が長い間育たなかったわけだが、中産階級というものは、世界の新しい方向とか、希望を引きずっていくものだ。一人の金持ちが独断的に自分の圧政を行うという時代はもう過ぎて、我々の多くが属している中産階級が何を望んでいるかということが、社会の情勢を動かしていくと思う。

アジアがよその国の人より進んでいるとか、優秀であるとかということではなく、かつてアジアが背負わなかった運命とか、任務というものを来世紀に私たちは背負うのではないかと思う。日本では「遠い親戚より近くの知人の方がいい」と言うが、そういう意味で近いアジアが共に手を携えて、来世紀に向かうという、この大方針をやはり変えることはできないのではないかと思う。

国家がお互いに仲良くやっていくためには、もちろん強力な哲学を持った政治家が絶対に必要だ。日本の政治には哲学がない、つまり、自分の身を滅ぼしてもこれだけは言うという覚悟が政治家個人にないということはよく言われているが、私たちはやはり政治家だけにそのようなものを任せてはいけないのであって、日本語では「草の根外交」というが、本当に小さな雑草の根っこがお互いに土の中に張っていくことでその土を保ち、隣の植物まで影響を与えることが大切だと思う。

和解と架け橋作りこそが人権の最大の擁護

【ガンジー】

世界中で人権が深刻に侵害される一つの大きな要因は、激しい紛争が起こる時だ。カンボジアであの悲惨な殺戮が行われた時に人権はあったか。最も大切な生きる権利はあったか。今日、アジアを含む世界各地で起きている衝突や紛争が、人間にとって最も初歩的な人権である生命そのものを奪っている。だからある意味で人権の最大の擁護者は、紛争に和解をもたらし、その根を取り除く人や組織や国である。

そこで太平洋戦争後、日本の指導者たちが各国を歴訪し、極めて謙虚に謝罪したことを伝えたい。当時青年であった私は、こうした謝罪を直接耳にする機会を得、憎しみが溶け去り、日本とアジアの隣接諸国との新しい関係が築かれるのを目の当たりにした。こうしたことを過小評価したり、こうしたことの人権に対する影響を無視してはならない。

もし極東において新たな緊張が回避されたのであれば、人権が進んだと言えるのではないか。もしインドとパキスタンの深い対立に和解をもたらすことができれば、人権を推進することができるのではないか。もしこれをしなければ、人権に関する他の様々な努力が何の役に立つのか。人権に関する他の側面を過小評価しているわけではないが、最も基本的な人権である生きる権利に果たす和解と架け橋作りの役割に焦点をあててもらいたい。

平和とは戦争が存在しない以上のもの

【シン】

平和は私たちの中から始まり、それが愛に根ざした正義、調和の取れた開発、そして連帯という動きで外に現われる。私は新聞記者に、「慈悲なき政治は[illegible]制である。正義なき慈悲は弱い。愛なき正義は純粋社会主義である。正義なき愛はたわごとである」と言った。平和とは単に戦争が存在しない以上のものである。平和は、対立する勢力同士の力の均衡の維持や、専制支配から抜け出すことに限られてはならない。平和は正義そのものとも言われる。さらには、他人や他国の人々の尊厳を尊重するという決意と友愛の実行とが平和の形成に欠かせない。

次代を創る「子供の権利」こそが必要

【カーン】

労働者の権利、産業人の権利、他の人々の権利が言われるが、今日の子供が明日の市民になることは忘れられている。もし子供が人権について当初からよい教育を受けたならば、国を将来の多くの破壊の道から救うことができるだろう。さもなければ、助けも、保護も、指導もなき子供たちが、世界中の様々な社会に対する大きな脅威の元になるかも知れない。

良心の声に従い、共通の道徳基準を基盤に

【樺山】

人権という問題は、それ自体社会的な権利なので、しばし[illegible]明文化され、侵害に対しては裁判が行われる。しかし、必ずしも社会的な制度だけで成り立っているのではなく、むしろそれを支えている人間的な価値、あるいは道徳的、かつ精神的な基盤の上に立っていなければならない。良心であるとか、純潔、無私、愛、正直、あるいは正義といった、それ自体は、一見すると極めて抽象的に見えるが、それぞれは人間の内面の声に従い、そこから出発する様々な道徳的、精神的価値であり、こうしたものの上に立たない限り、基本的人権というものは意味を失うだろう。

異なる宗教を背景にして話された方々のそれぞれ表現する言葉は違うが、この問題を最終的に突き詰めていくならば、これから私たちは二十一世紀に向けて物を作り出すことも重要だが、同時にその中に私たちの内面の声、人間的な価値をいかにして付与していくかが大切だ。

あるいはそのような作業の後に、異なった人間、異なった宗教、異なった民族がいかにして和解をつくり出せるのかということが、それがつまり基本的人権を実現する最も重大で、かつ場合によっては最も早い方法ではないかという気がしてならない。

一人ひとりの責任とお互いの連帯

【シン】

人の権利のあるところには必ずや責任が存在する。世界に対する人や社会や国の責任とは何なのか。人の責任なきところに人権はなく、神は私たちを創造することによって私たちを愛したのだから、神は私たちの愛を欲する。神は見えないのだから、この愛は神に対してだけでなく、人を通して与えられる。救いは人を通して、人の中で、人と共に行われる。先ず私たち自身に対して、続いて隣人を、第三に社会を、第四に全世界に対して責任を取るということが重要なことだ。

私たちの責任は重要だ。ただ単に責任の規則やルールを述べることはできない。だから、隣人や国や世界のために何をするのかを毎朝少なくとも三十分は瞑想して考えることを、ご出席の方々に提案したい。これは自分のためということではなく、自分を無にすることで責任をとるということだ。外面的な平和は内面的な平和の結果であるように、責任も何か外に見えるように現われてくるものだからである。先ず集まらなければ、そこから展開していくこともで

きない。先ず各自が自分で考え、次に他の人々と連帯する。より住み易く、去るには惜しい世界を築くために連帯し、その果実として平和が訪れる。

祖国愛から人類愛へ

【ガンジー】

「日本には経済的な目標しかない。日本は精神的な国ではなく物質的な国だ」と言う人が世界中にいるが、私はそれに断乎反対する。日本には深い精神性がある。経済的発展や技術的発展の背後には、大変な自制がある。苦難を受け入れ、苦しみ、経営者は一生懸命働き、重役は極めて難しい労働条件を受け入れる。労働者は朝から晩まで汗水を流している。日本の発展の陰には物質主義ではなく大きな犠牲がある。

しかし、私は日本の変革を切望する。それは日本の改宗だ。ヒンズー教徒になって欲しいのではない。日本人に祖国愛から人類愛への改宗を考えていただきたい。

なぜ日本は人類愛を受け入れることに慎重なのだろうか。日本人が冷淡なのではない。日本人に心がないとか冷淡だといって非難する人は誰もいない。世界の苦しみに煩わされることを拒んでいるのでもない。世界に出かけて責任を担うということはできるかどうか不安な未知の領域だからだ。日本にとって最も栄光の時代は、日本が人類愛という宗教を果敢に受け入れた時に訪れると心の底から信ずる。日本はその役割を担うよう運命づけられていると信ずる。日本がかつていかに戦争を遂行したかを語る人がいるが、日本がこの運命を全うしたならば、日本がいかに世界平和を遂行したかが、将来語られることになるだろう。

先ず身近なアジアに人類愛としての援助を

【石原】

ここまで日本経済が大きくなった背景には、多くの国の人々の心温かい援助があった。日本は戦争をしたが、日本人そのものを憎んでいるのではないという気持からの援助があったのだろう。そのお陰でこれだけ大きくなった経済大国日本の国民として、今度は、日本へ贈られた多くの援助に対するお返しをしなければならないと思う。

今後、日本が自国の成長を多少遅らせてでも、アジア各国の発展を援助するという方向に転換をしなければならない。これはガンジー氏が言われたように祖国愛から人類愛へ改宗しなければならないが、我々はやはり先ずアジアの人々に人類愛としての援助の手を差し伸べるべきであろう。日本の技術と資金と人類愛という宗教をもって接するならば、必ず何年か後にはアジア各国の国民の生活状況は非常に向上し、それによってその国の経済全体が伸びていくという良い循環が起こるのではないかと考える。

今、平和のために何をなすべきか

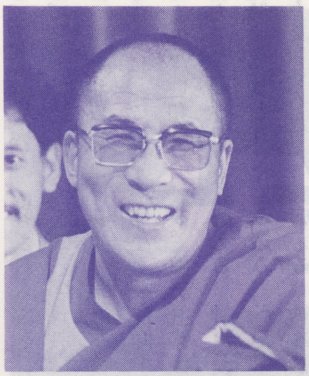
【樺山】

人権にかかわる様々な背景、あるいはその根底に横たわる人間的な価値、あるいは精神的な価値と言われるもの、それを時には自由と呼び、時には愛と呼び、時にはそれを正直と呼び、様々な呼び方が可能である。また宗教や言語によっても違うが、いずれもそれぞれの人間的な内面の価値に手がかりや足がかりを求め、その上に立って、私たちは人権、制度、国家、経済といった様々な文明的な施設や機関を作り上げてきた。その内面的な人間的価値こそが今最も強く問われている。

宗教ばかりでなく、国家、政府、経済界、企業、個人、また個人が集まった様々な団体も、それぞれの方法で平和と新しい秩序の構築に関わり、それに深い責任を負うことができる。その方法は決して一様ではなく、ガンジーの非暴力的抵抗という方法もあれば、経済的な生産が一つの平和に結び付く、あるいは新しい秩序に結び付く手段にもなるだろう。その他、様々な生活場面で幾つもの方法、手段が私たちの前に開かれている。そうした手段を通して、私たちはこれからも世界の新しい平和と秩序に向けて努力していかなければならないと考える（終）

未来の世代のための世界平和を

ダライ・ラマ14世(チベット))



1935年生まれ。4歳で転生によるダライ・ラマ14世として即位。50年中国軍のチベット侵入。54年毛沢東との和平交渉失敗。59年インドに亡命。88年欧州議会にて「中国と共に」自治民主チベット建設を謳う和平案提案。89年この非暴力的努力に対しノーベル平和賞受賞。他宗教との交流、地球環境保護にも努力。

人間らしい思いやりと愛の心を

外面の進歩と内面の進歩の歩調を合わせなければならない。人間は機械に作られたのではない。もしそうだとしたら、人間の要求もまた、全て機械が叶えてくれるはずだ。私たちはどこか別のところから来たのだから、物質的要求が満たされるだけでは不充分で、精神的要求も満たされなければならない。

十九世紀から今世紀始めまで、物質さえ充分に供給されれば人間の抱える問題は全て解決すると信じられていた。幸い、今日科学的、物質的進歩は高水準に達したが、それだけでは完全な答えにはなっていないことが今や明らかになった。

私たち人間は、同じ人類家族の兄弟、姉妹であり、住むところはこの惑星しかない。従って、より良い人類社会、より良い人類家族、より良い世界を作る責任は人間一人ひとりのものである。今日人間は過去の経験から学んだ結果、より大人になった。今や人間の魂と思いやりを基盤とした新しい道を考えるべき時である。そのことに世界の諸宗教は特別の責任があり異なる宗教同士の協調が不可欠である。

残念なことに、過去において、また現在でさえ、宗教の違いが人類に紛争、分裂をもたらしている。しかし、世界の諸宗教には、確かに相違点は沢山あるが、思いやり、許しの心、愛という最も大切なメッセージは共通している。この共通の土台に立てば、全ての宗教は共存し協力できる。

東洋には、心あるいは内面世界と繋がりをもった哲学を思い浮べる一方、西洋には、進んだ社会、科学、技術によって発展した社会のイメージが心に浮かぶ。内面世界の平和、内面の幸福、成長という問題では、東洋の哲学ならではの役割がある。私たちアジア人は、人類に貢献する何らかの力を秘めている。アジアでは、依然沢山の紛争が目につくが、アジアには長く豊かな伝統と文化がある。人類に貢献する力を持っているにもかかわらず、この豊かな伝統を日々の生活に活かすことが私たちに欠けている。

非暴力の道を貫いてきた日本独自の役割と責任

私たちは他人の役に立つ前に、絶えず自分自身を点検しなくてはならない。MRAの大切な実践の一つに、他人を変えようとする前に、先ず自分自身が変わることが大切だというセルフ・チェック(自己点検)がある。私の知る限り、日本では憲法によって、他国に武器を売ることを禁じている。また、軍隊を海外に派兵することも厳しく禁じてきた。これらは正しく賢明である。現在生まれている新しい状況下においても、対応を変える必要はない。日本が武器を輸出しないできたという事実は非常に大切な点だ。

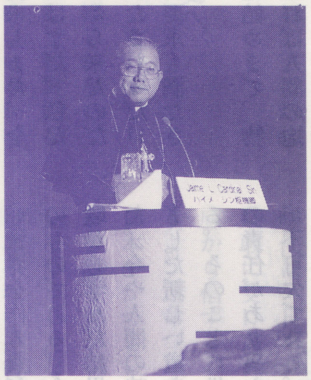
武器をビジネスにするのは無責任であり危険であると、私は機会あるごとに言っている。アフガニスタン、レバノン、南米などで罪もない人を殺している武器は、みな外国製だ。他人に武器を売って得た金で生活を楽しんでいる人々の気持が、私にはとても理解できない。恐ろしいことだ。だからこそ、日本のしていることに意義がある。日本がこれを堅持、継続すべきであるのはもちろん、世界が見習うべきことなのだ。日本は技術的に高度に発達した国でありながら、厳しく非暴力の道を守っている。

日本の人々は、暴力に加担しないということで、自らの独自の役割と貢献を自覚するに止まらず、世界の他の地域に平和をもたらすという、より大きな役割をも考えているように思う。日本がより多く貢献することを願い、またそれを信じている。

(終)

平和は良心と連帯の産物

ハイメ・シン枢機卿（フィリピン）



1928年生まれ。父は中国人。日本軍占領下、死刑の危険を冒しても米軍放送を聴いた勇気の少年。59年ロハス市の大学卒（教育学）。74年マニラ大司教区教区長。76年最年少の枢機卿に指名。86年大統領戦で民主勢力一本化を支援。ピープルパワーの精神的支柱としてマルコス政権打倒の無血革命を成功に導く。

平和は神からの賜物という現実からの出発

平和に関する議論では、どうしても現状でのマイナス面ばかりを見てしまい、悲観的になりがちだ。現代社会は敵意や争いごと、不和に満ち、暴力や物欲、権力がはびこっていることを私たちは常に目の当たりにしているからだ。残念なことに、この世界は未来に向かってより深い和解へと進んでいるのではなく、多くの勢力が対峙しながら危険かつ複雑化していくことが余りにも多いからだ。

世界の中でプラス面がマイナス面に圧倒されるのをそのまま見過ごすのは、非常に悲しむべきことだ。世界のあちこちで射し始めている光が闇にかき消されてしまうのを、私たちは手をこまねいて見ているわけにはいかない。

宗教の意味するところは、超越的な存在の神秘によってしっかりと包容されること、そしてその体験をすることだ。宗教的存在としての第一歩は、信じる者自らが踏み出すのではなく、信仰する神によって導かれる。神が主導され、私たちはそれに応える。神は愛をもって私たちを包み込み、私たちは愛をもってそれに応える。神は私たちの生活を善で満たし、私たちは感謝の心を神に捧げる。

広い意味で言えば、平和とは崇高なる神の手によって与えられる最高の賜物である。このような平和の本質についての奥義を理解することなしに、平和を達成することはできない。平和は私たち自身の手によって作りだし与えるものだと考えている以上、平和の実現に挫折することは目に見えている。

平和とは、神からの賜物だということを何よりも理解しなくてはならない。先ず私たち自身が満たされ、それを周りにも及ぼしていく、己れの分を越えるような豊かさを受け継ぎ、それを他人にも分け与える。それが平和を達成するということである。これが宗教と平和の結び付きの意義だと言える。この考え方は、謙遜の意識に端を発していると思われるかも知れないが、そうではなく、むしろ現実主義から生まれているのだということを強調したい。

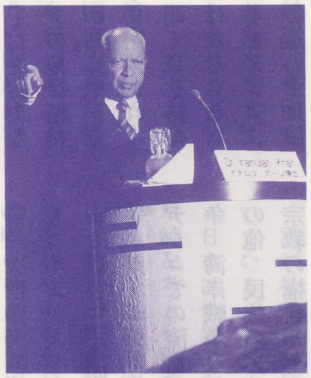
世界の偉大な宗教は、様々な差異があるにも拘らず、神の愛と人の愛とが一つに収斂することについては、どの宗教も同じ考え方をとっている。人格には、神が宿る特権が与えられている。神は、他ならぬ人間の内に宿っている。隣人を見出すことなく神を見出すことはできない。宗教と呼ぶにふさわしいものは全て、人間の尊厳に絶対的な敬意を[illegible]ことが基礎となっている。平和の基盤としての普遍的倫理は、このような脈絡において初めて正しく理解される。

全人類は一つという視点に立つ見返りのない援助が必要

全人類は一つという名のもとに、アジアの豊かな国々の皆さんに、地球の資源をアジアの兄弟姉妹との共通の財産として取り扱うようお願いしたい。地上の授りものの所有者というよりは、むしろ管理者という意識を持ってほしい。市場メカニズムの観点からだけでなく、全人類は一つという視点にたって、ただ単に利益を追求するのでなく、真に相手国の経済発展に寄与するような海外投資を行ってほしい。将来の見返りを期待しない援助、紐付きでなく、また条件をつけず、災害時や天災時だけに限らない援助が望まれる。貸借に法律を適用するだけではなく、自らの〝義務〟を果たそうと努力している債務国に同情を寄せていただきたい。支配するという意識からでなく、アジアの諸国民と科学技術を共有してもらえれば、彼らは基本的ニーズを自力で満たす力を切り拓いていくことだろう。（終）

死んだ平和ではなく生きた平和を

イナムラ・カーン博士（パキスタン）



1914年ビルマ生まれ。36年ラングーン大卒。42年日本軍の侵攻に伴いインドに避難。47年インドとパキスタンが分離独立し、48年以後パキスタンに居住。62年世界イスラム協議会事務総長。84年世界宗教者平和会議（WCRP）会長。88年他宗教との交流など「イスラムの移動大使」としての活躍にテンプルテン賞受賞。

世界平和に対するアジアの図り知れない貢献

二十一世紀を目前にした現在、宗教の多元性は現実となっており、無視することはできない。伝統、人種膚の色や富を基準に他者より優れているとか最高のものとして選ばれたと主張することは誰もできない。創造主の前では全ての人々は平等であり、敬虔さに勝る者のみが他者より優れている、とコーランの戒律は説いている。

今や信仰を持つ者全てが調和と協調のために努力する時である。相互依存と分かち合いの世界であり、単に天然資源についてだけでなく、獲得した富をも分かち合うことである。そしてあらゆる人々の共通の福利のために、心を癒し連帯する崇高な意識を共有することである。

世界平和に対するアジアの貢献には、図り知れないものがある。アジアは世界最大の大陸であると共に、多くの文明を育み、世界的な宗教の発祥の地でもある。仏教やユダヤ教、ヒンズー教、キリスト教、ジャイナ教、神道、イスラム教などが生まれた。その起源は、伝説上の歴史が始まる前にまで溯る。宗教の開祖は仏陀であれ、モーゼであれ、キリストやモハメッドであれ、究極的には神という同一の根源から発しているため、名前は違っても、みな同じ神に帰依しており、真実と正義、平和、調和、善意という、基本的に一致する永遠のメッセージを伝えた。いずれの偉大な預言者も、当時の様式や、それぞれの土地の言語で善意と平和と調和のメッセージを伝え、宗教を定義づけたといえる。

平和の受益者と、平和の創造者といった区別を無理矢理するのは間違っている。なぜなら全ての人々が、異なる形で平和に貢献しているからだ。日本は今日、最も熱心な平和論者であり、第二次世界大戦後の記録がその主張の真実を裏付けているが、五十年前にはその日本が真珠湾の悲劇を引き起こした。

「生き、生かす」共存の精神を広げよう

私たちが望んでいるのは、よどんだ活気のない平和ではない。生きた平和が必要である。なぜなら平和を通じてこそ、全ての人々に進歩と繁栄をもたらし、正義と道徳的価値観の輪を大きく広げることが可能になるからだ。真の平和を実現するには、全ての崇高な徳性を持ち寄る必要がある。また寛容さに欠ければ、宗教や信条の異なる人々と平和を築くことはできない。

宗教の違う人々と付き合う時には、大きい心をもって、コーランの言葉「あなたにはあなたの宗教、私には私の宗教」を鉄則とすべきである。「生き、生かす」、すなわち共存という素晴らしい精神を普及させよう。この広い世界では、皆が幸せに暮らすことができる。イスラム教には、儀式や祈りだけでなく、力強い精神と生命を包み込むシステムがある。宗教はよどんだ儀式的なものの連続ではない。むしろ活気ある行動的な勢力であり、それに沿った生き方が求められる。

新世界秩序とは、信頼に足る安全保障制度を確立するものであることが望まれる。いつ、どこで、いかなる紛争や平和への脅威が生じても、的確な共同行動で対応できる制度であるべきだ。

今世界で一番必要とされているのは、恒久平和と総合的な安全保障を約束する効果的なシステムを樹立することだ。共に力を合わせて新しい世界を築き、政治面のみならず社会や経済面での正義が存在し、子供を含む全ての人々に平等な機会が与えられ、相応の開発と繁栄を享受できるようにすべきである。手に手を取って協力し、より住み易い世界を築いていかねばならない。（終）

祖国愛から人類愛へ

ラジモハン・ガンジー上院議員（インド）

1935年生まれ。祖父は独立の父ガンジー。56年デリー大学卒。MRA創始者ブックマン博士と各国で平和活動に従事。64年「ヒンマット誌」編集長。76年検閲制度に反対して投獄される。85年米国で宗教対立を超えたインド亜大陸の和平を研究。89年上院議員。90年彼の半生「真実との出会い」がビデオ化。

世界宗教発祥の地アジアで数限りない紛争が引き起こされてきた

世界の主な宗教はアジアの地で生まれ育まれてきた。この事実を私たちはむしろ恐ろしいことだと捉えなければならない。アジアの地は精神的に豊かであるにもかかわらず、そこに住む人の心は頑なに閉ざされ、預言者や聖人の言葉に聞く耳を持たなかったということにほかならないからである。神が預言者をアジアに遣わしたのは、預言者を遣わすに値するほどアジアの人が立派であったのか、それとも堕落しきっていて誰よりも預言者を必要としていたからなのか、ぜひとも神に伺いたいものである。

アジアが世界平和に対して、どのような貢献ができるのかを見極める前に、アジアでどれほど多くの紛争が起きてきたかを指摘しておきたい。第二次世界大戦後の歴史だけを見ても、インド人とパキスタン人同胞による殺害（一九四七年）、ベトナム戦争、カンボジアの大量虐殺、バングデシュでの流血、イラン―イラク戦争、湾岸戦争などが起きている。この他、民族のアイデンティティーや宗教の権利、ナショナリズム、分離独立運動、領土保全を旗印とした衝突など、余り取り上げられていない対立が無数に起きている。さらに、このような不愉快な真実には耳を貸さない地域が随所にあることを認めなければならない。他人を批判するためではなく、謙虚な気持で私はこの事実を直視したい。

今こそガンジーの教えが求められている

暴力に訴えず、かつ外国の支配者に対する憎しみの感情を極力おさえてインドの独立を勝ち取ったことは素晴らしい業績である。無数の人種、宗教、種族を抱える今日のインドにとって、この非暴力の教えは以前にも増して重要である。しかし、我々は毎日憎しみや暴力行為に走り、ガンジーを初め、我が国の多くの偉人の教えを無視している。

また、「善き人とは他人の痛みが分かる人である」というガンジーの教えも無視されている。この「善き人」の定義は、グジュラート出身のヒンズー詩人ナルシー・メータの詩からの引用であり、ガンジー自身が作ったものではないが、この定義は重要かつ革命的である。「善き人とは、規則や戒律や断食日を全て守る人を言うのではない。善き人とは他人の痛みが分かる人のことである」、つまり、イスラム教徒の痛みが分かるヒンズー教徒、ヒンズー教徒の痛みが分かるイスラム教徒は善き人であり、アンタッチャブル（カーストの四階級にさえ属さないとされる人々）の痛みが分かる上位カーストのヒンズー教徒は善き人であるとマハトマ・ガンジーは教える。この考えは今でもなお革命的といえる。ついにガンジーは、「イスラム教徒に対して妥協策をとった」と思い込んだ人々に暗殺された。今でもインドにはガンジーのイスラム教徒やアンタッチャブルに対する姿勢を是としない人が沢山いる。しかし、これだけはためらうことなく申し上げたい。「隣人の痛みを思いやらなければならない」というガンジーの教えは、民族やナショナリズムがぶつかり合っている今日の世界にこそ重要である。この教えこそ、我々が求めている倫理の核に組み入れるべきではないだろうか。これは仏教やキリスト教、イスラム教の倫理の教えと矛盾しないどころか、それほど違わないものである。「他人の痛みを思いやらなければならない」という表現は大まかで不完全ではあるが、アジアのメッセージとして通じるものだと思う。

共産主義とナショナリズムの共通点

共産主義とナショナリズムに全く

共通しているのは罪の転嫁である。「我々が抱えている問題の原因は他人にある。他の階級や他の民族、あるいは他の国家を束縛、鎮圧、包囲すれば平和は自ずと実現し前進する」という考えが共産主義とナショナリズムの核心にある。

貧困は確かに暴力の温床である。世界各地で市場経済が国家主導型経済に比べて格段の成功を収めているのも確かである。しかし、市場経済がアジアや世界からテロを一掃し、民族や国家主義的なグループの橋渡しをする宗教であるかのように錯覚してはならない。欠点があり残酷であった共産主義の滅亡に泣くことはないが、共産主義と共に理想主義をも埋葬してはならない。享楽主義もまた欠点だらけで残酷なものになり得る。

日本は世界の友に

憎しみを和らげることができるのは何か。九一年九月、ヒトラー時代からスターリン時代にかけて悲惨な経験をした人にベルリンで会った。心からドイツ統一を望んでいた彼の祈りが通じたのだった。私は、「過去四十五年間異質で不幸な状態に置かれていた東独の人がどうしたら西独に溶け込めるのか意見を聞かせてほしい」と彼に訊ねた。「友情によって」と彼は答えた。この「友情」という一言が私の心を打ち、今なお鳴り響いている。

「日本は世界の友人に」。どうかこの単純な考えを熟考していただきたい。友人ならば経済的援助もする。しかし、友人は経済的援助さえすればよいというものではない。友人は隣人の戦いを止めさせることができるかもしれない。しかし、友人は警察官ではなく、警察官以上のものである。出向いて話を聞くため時間を作る。また、親身になり、信頼を獲得し、ずっとその信頼に値しなければならない。カンボジアの和解交渉で日本は重要な仲介役を果たしたが、ただの仲介人なら「仲介料」を取り、仕事が終わればどこかへ行ってしまう。

世界の友としての日本は、セルビア人とクロアチア人、アルメニア人とアゼルバイジャン人、キリスト教徒とイスラム教徒、ヒンズー教徒とイスラム教徒、シンハリ人とタミール人、そしてあらゆる派に属するカンボジア人の間に立つ友になってほしい。他の国々も友情の使節として日本の協力を望むだろう。さあ、共に平和を担う友情の航海に船出しようではないか。

（終）

○MRA関係ビデオのご案内

予約受付中

ダライ・ラマ14世
ビデオメッセージ
愛と平和

近日完成
VHS(30分)四千五百円

制作：㈳国際MRA日本協会
編集，販売：アジアフォーラム

○MRA関係出版物のご案内

アジアから人類へのメッセージ
宗教が語る世界の平和

㈳国際MRA日本協会 編

〈協賛団体〉 松下電器産業㈱／㈱住友銀行／㈱東芝／日産自動車㈱／他

定価1,500円（税込）
四六判上製 208頁

推薦のことば

米ソを中心とした二極冷戦構造が崩れ去った現代。21世紀に向けて新秩序の構築が求められているが、いまだ暗中模索の状況にある。この混沌とした時代に一つの道筋をつけるものは一体何なのか。

『宗教が語る世界の平和』では、ダライ・ラマ、ハイメ・シンなど四大宗教の指導者達が、良心、道徳等に基づいた21世紀に向けてのアジア・日本の貢献・役割を示唆していく。

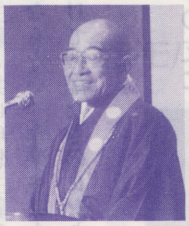
本書は、国際貢献、モラルの再構築が求められる日本の今後のあり方を問う好著である。

松下電器産業㈱相談役
山下俊彦

アジアを越え、宗教を越えて、今、非暴力の理念を世界へ

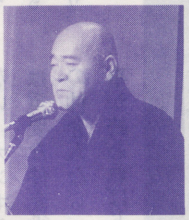
「世界平和は一人ひとりから」

大阪国際講演会（都ホテル大阪）より



瀧藤尊教

1922年生まれ。東京帝国大学と京都大学で学ぶ。比叡山大仙院住職、四天王寺中学、高校長を経て四天王寺管長。



石川洋

1930年生まれ。一燈園創始者西田天香に師事。現在一燈園同人。アジアの難民、スラム、被爆者の支援等で活躍。

サレハ夫人

1923年生まれ。49年ロンドン大卒。現在高等教育推進協会会長。MRAマレーシア協会会長。マハティール首相義姉。

「和を以て貴しとなす」に秘められた意味とは

四天王寺管長　瀧藤尊教

今日、このような各宗教を背景とする最高の方々の立派なお話を拝聴いたしまして、心洗われた感であります。

今回の演題に「アジアの貢献」とありますが、それを見て、一九二二年に来日されたアインシュタイン博士が日本を去るにあたって残された「世界の国々はまだまだ争いに明け暮れているが、最後には戦い疲れる時が来るであろう。その時、人類はアジアに盟主を求めるであろう。世界の文化はアジアに始まってアジアに還る」というメッセージを思い浮かべます。今日、いみじくもアジアにおいてそれぞれご指導を願っている聖者たちのお話をうかがい、そのメッセージが思い起され、大変心暖まるものを感じます。

しかしながら、今日までの人類を眺めてみますと、どうしてこう人間にはこのような殺し合いの血がたぎっているのだろうと、悲しい思いにかられてなりません。強者が弱者を侵略し、その覇を競って長い歴史が血塗られていりました。近代以降も、植民地政策や共産主義の出現と、いろいろな惨禍を生んでまいりました。これからの人類は何としてもこういう惨禍から離れた共生の世界を確立せねばならないと、常々知らされ教えられ考えさせられています。

しかし、なかなか共生の世界への本当の目覚めが容易に全ての人々に浸透し得ない現状です。世界の宗教職にある各賢者の方々が、それぞれの信奉者に対して教えをご徹底願うならば、それが燎原の火となって大きく世界に力を浸透させていくと思わざるを得ないのです。

時、あたかも秋が深まってまいりました。私は落葉を見つめていると、「はらはらと落つる木の葉にまじりきて栗の実ひとつ土に声あり」という詩を思い浮かべます。まこと全て世の中の営みというのは、永遠に命が続き流れています。大木から落ちた栗の実は、母なる故郷の土に帰りついて、その帰還を報告いたします。大地も温かく迎えます。やがてまた、そこより新しい栗の木が成長していくのです。

命というものは、ガンジス川の流れのごとく、宇宙という大きな川の中を流れる光の波であろうかと思います。肉の眼に生と見え、死と見えるこの姿は、いわゆる現象面の現われにすぎず、本格的な命は永遠に変わることなく流れているものです。千差万別の宇宙のものみな全てが、同じ我々の水の一つの現れとしての、波であるといった自覚をこの詩の中から汲み取ることができるのです。

天地の間は、空飛ぶ鳥も地を駆る獣も土も木も草も全てが天地の命をそれぞれに宿し、それぞれ互いに助け合い、交わり合って働くところにこそ、その真骨頂が存するわけです。ゲーテの詩の中に、「あらゆるものが一つの世界をおりなしている。一つひとつが互いに働き互いに輝いている」という一節があるようです。あるいは、「遠く近く、近く遠く、大は小に、小は大に、各々その姿を示現する」という詩もあります。まこと、大波が小波に、小波が大波になり、遠い波が近くに現われ、近い波が遠くに現われる現象は千差万別ではありますが、同じ泉の水の源であると知らされる時、全て皆同胞、はらからの念に心高ぶるを覚えるのです。

今から一千四百年前に、聖徳太子が私のおります四天王寺を建立されましたが、聖徳太子は十七条憲法の第一条に、「和を以て貴しとなす」という名言を残しています。その和とは、単に仲よくせよという単純な言葉を述べたわけではないのです。本

音の命の源に思いを馳せ、全て人類同胞だという大自覚に達し、相互の敬愛の念に立つことによって、初めて成り立つ大和の世界を強調されたものであろうかと拝察しております。その十五条には、「私を持つことによって争いが起こり、私をなくすことによって第一条の和が成り立つ」ということをさらに追求しています。民族のエゴ、国家のエゴ、個人のエゴ。こういったエゴイズムが全ての社会を傷つけ、一つの世界だけに局限する人間の問題が、幾多の争いを引き起こしています。何としても私たちは、宇宙の中の同じ流れである各々の立場を相互に尊重し、敬愛しながらしっかりと手を差し伸べ、助け合った生きざまを確立していかなければならないと切に思う次第です。

今日の世界の情勢は、まだまだ楽観できない状況です。本当に心を宗教にいたす者、あるいは思想にいたす者は、今こそ団結して大いにこうした人類同胞の営みに邁進せねばならないと考えています。かつて、沼津の駅に下車した時に、「原子爆弾より強いもの、それは愛である」と刻まれた石碑が立っていました。「ちょっとキザかなぁ」とその時は思いましたが、今思い起こせば決してキザではなく、●に貴い教えだと思います。日本は、広島、長崎において原爆の洗礼を受けた唯一の国、民族です。それよりなお遙かに強い愛の心を、全世界に私たちの手で大きく広げてゆく責務を感じるのです。

無尽燈という聖徳太子が注釈されました教えの一節に、居士に説得された悪魔たちが悪魔の世界に帰ることを大変嫌がる物語があります。居士は「闇の夜に一燈の灯をつければ闇は明るくなる。さらに一燈を二燈に三燈にとつけてゆけば●無尽にその光が天地を輝かす。あなた方にはその一燈になってもらいたい」とる教示したところ、悪魔たちは潔く魔界に帰っていったというのです。なかなか真の世界の平和への道は遠ございますが、一人ひとりが絶えずそういった心を抱き、善念良き想念を天地に大きく拡散しながら、手合せ努力してゆきたいと念ずる次第です。

（終）

戦争の原因は私にあった

一燈園　石川洋

アジアの貢献ということについて、日本人の一人、あるいは日本の宗教者の一人として、どんな姿勢で平和に対する貢献を果たしたらいいのかと、常日頃思っていることを、ご報告したいと思います。

私は一九三〇年に生まれ、現在六十一歳になります。中学に入学した時に、日本軍がシンガポールを占領しました。少年時代は戦争の真っ只中と申し上げてよいかと思います。私は戦争には参加していませんが、戦争の中の生と死、人間の真実の生き方とはなんだろうかということを多感な少年の心で追求し、苦しみぬきました。

大きな意味で私は三つの大きな疑問を持ちました。

一つは、どんなことがあっても人を殺すことは間違いだということです。戦争中でも仮に私が友人を殺害すれば犯罪行為です。それが戦争という国と国との戦いの中では、むしろ評価されるわけです。どうして人を殺すことが評価を受けるのか。人を殺すことは間違っていると思いました。

もう一つは、戦争という歯車の中で全く偶然に多くの方々の命が失われていくということでした。そんなに偶然に人の尊い命が失われていいのか。人間の歴史や運命とは何なのだろうか。もしも人を殺すことが悪いことで、尊い命が失われることが決して正しい生き方でないとしたら、私たちはどういう生き方をすればよいのだろうかということです。

三つ目は、戦争の原因はどこにあるのだろうかということでした。これが少年時代から今まで、ずっと抱き続けている私の三つの命題です。

十七歳になり、志を抱いて京都に参り、一燈園の創始者、西田天香さんと出会いました。天香さんは若かった私に分かり易く、「人はな、立派にならなくてもいい。偉くならなくてもいい。人のお役に立つこと、人のお世話のできる人間になりなさい」とおっしゃいました。真実に生きる心は自分を捨てることから始まるということに、私は初めて気付かさせていただきました。人のお役に立ちお世話をさせていただくことならば、旗を持って先頭に立つ必要はありません。人の後片付けをさせていただいて満足です。そのお言葉をお聞きし、今日までの四十三年の人生を棒に振ったとしても悔いはありません。

しかし、血を吐くような苦しみであった少年時代の三つの疑問が解明したわけではありせんでした。何年か経ちまして、戦争の原因は誰でもない私だということにハッと気が付

きました。私が変わらなければ、私が平和的な生き方をしなければ、平和も生まれてこないのです。問題は他人ではなかったのです。先ず、戦争の原因は私であり、平和とは自分が変革されることから生まれるのだということが分かったのです。悲しいのでもなく、嬉しいのでもないのに、止めどもなく涙が出ました。

私がアジアに最初に足を踏み入れたのは、ニューギニアでの遺骨収集でした。そして沖縄でも、四七〇体の遺骨を供養させていただきました。ニューギニアのジャングルの中に累々と遺骨が散乱し、海中に沈んでいる船の中にもご遺体が眠っていました。沖縄の洞窟でもおびただしい数の遺骨に出会いました。頭蓋骨の一つひとつに表情がありました。

私がもう五年早く生まれていたら同じ姿になっていたかも知れません。他人ごとだとは思えませんでした。このご遺体が意味のない歴史の犠牲になるのか、それともこの人たちの死が平和のためにお役に立つのかは、今残された者の責任であり、死んでいった人たちの思いも含めて、平和に対して貢献しなくてはならないと誓いました。私の平和への旅は、その時から始まったと思います。

占領下を終えた沖縄でのご奉仕の中で、歴史の苦しみとか時代の痛みというものは、いつでも弱い人たちにしわ寄せされてくるということを知りました。大人よりは子供、男よりは女、富める者より貧しき者、健常者よりは障害者、いつでも弱い人たちに歴史の苦悩と時代の問題がしわ寄せされ、そして歴史は全くそれを放置して前へ前へと向かって進みます。私は、これでは本当の平和に対する姿勢というものは、生まれてこないのではないかと思わずにはいられませんでした。難しいことの分からない私は、その歴史のしわ寄せの中で苦しんでいる弱い人たちと一緒に生き、その後片付けをご奉仕する中で、歴史の方向性を見い出そうとしました。これは、師匠の西田天香さんから教えていただいた道だと思っています。しかも、その弱い人たちの中に飛び込んでみると、その弱い人たちの中に生きることの尊さと愛の深さ、許しの大きさがあることに驚きました。

WCRP（世界宗教者平和会議）の難民のお仕事で、カンボジア三派連合の一つのソン・サン派の難民キャンプに、全く雲を摑むような気持で入りました。目の前で子供が死にました。声をあげて泣いたこともあります。ソ・サン首相の息子のスーベールさんは、「難民とは武器を持たない者である。武器を持たない者が生き残らなければならない。武器を持たない者が生きるための努力と真心を傾けるならば、世界は必ず平和になる。それが難民問題である」と言われました。私には、支援したり援助をするといった奢りがありましたが、この人たちから生きることの尊さ、愛の必要性、そして希望のある世界を作る責任を学ばされました。

もう一つご紹介申し上げたいことは、日本に関わることです。広島と長崎の原爆の犠牲者の中に、日本人ではない方が沢山おられます。かつての不幸な歴史の中で、日本民族となることを強要され、日本人として戦争に巻き込まれた朝鮮半島の人々です。今でも確かな数字は分かりませんが、韓国では二万人近い方々が原爆被害者として苦しんでいます。そうした方々の多くは、病院で専門の医者に診てもらうこともできない生活困窮者です。ソウル郊外に住んでいるゴンさんという方は、おうかがいするたびに手で顔を覆って声をあげて泣きます。韓国は儒教の国で、親より早く死ぬことはできません。九十歳を越えたお父さんが元気でおられ、死ぬこともできないのです。地下にある部屋に住んで、家賃が払えないために追われる身です。戦争はもう遠くに去りました。しかし、戦争の傷跡は弱い人の中に生きているのです。

韓国人被爆者の調査に最初に韓国に行った時は、韓国の人にずいぶんと叱られ、ひょっとしたらこの人たちに殺されるのではないかという恐怖さえ感じました。しかし、眼を閉じてその言い分を聞きますと、もっともなことだと思いました。韓国の人たちは戦争の必要性はなかったのです。いうなれば、私たち日本人は原爆の被害者ではありますが、朝鮮半島の人たちに対しては加害者です。その責任はアジアの貢献を語る時、忘れてはいけないのです。

その当時、韓国人被爆者の会会長としておられたカン・スンウォン先生は、独立運動に関わっていたために拷問を受けた方で、広島で一番日陰の独房に入れられていたため、被爆はしたものの助かったそうです。韓国に戻って、日本を呪い、日本の記録を抹消し、日本を忘れたいと思ったそうです。なかなか忘れることができない苦しみの中で、原爆被爆者会会長の要職で再び日本を訪れました。その時にカンさんは、「自分の考えが誤っていたことに気が付いた。

韓国の人以上に我々韓国人被爆者のために、命をかけて真心を尽くしお世話して下さっている愛のある日本人に出会ったからだ。日本を呪うのはやめた」と言って下さいました。

越えられない戦争の溝を越えるためには、愛のある人間になる以外ありません。私はカン先生の手を握って、心の底からお詫びし本当に泣きました。私は韓国に入って愛のある韓国人に巡り合うことになろうとは思っていませんでした。

私たちは第二次世界大戦後、多くの国々のご協力によって確かに経済成長をいたしました。しかし、それだけでよいのでしょうか。援助といっても物質的で急激な開発は、私はある意味では大きな過ちを残すのではないかと思っています。MRAの創始者であるフランク・ブックマン博士は、「平和とは戦争が存在しない状態ではなく、人と国が変わる時に実現する」と言っておられます。

ただの非暴力とか、武器を売るとか売らないかとかだけではなく、もっと大事なことは私たちの社会が、経済が、教育が、福祉が、政治が、一人ひとりの家庭が、二十一世紀の本当の幸せとは何であるかを考え、その価値観をアジアの多くの先輩に学びながら、少なくとも私たち日本人は、死んでいった日本人だけではなく、多くの犠牲者の思いを生かしきるほどの深い信仰と愛の活動をしなくてはいけないのだと思います。ご恩を大切にして、ただ宗教者だけではなく、サラリーマンも主婦も経済人も教育者も、皆アジアの問題とは何か、貧困の問題とは何かを考え、一食を節せる中で大衆が本当に深い精神と友愛を持って、自らが変わり、国を変え、世界に貢献しうるそれぞれでなければならないと思っています。

（終）

憎しみへの謝罪を通して得た平和

高等教育推進協会会長　サレハ夫人

今朝私は日本の経済界の方々とお会いして、この方々の責任感と献身ぶりに感銘を受けました。そして今、この国の尊敬すべき精神的指導者の方々と席を共にしています。富と精神を兼ね備えた日本から、これ以上何を求めることができるのでしょう。

これまで著名な精神的指導者の方々が講演されましたが、それに比べ私は単なるボランティアのソーシャルワーカーです。私が唯一誇れる資格は、MRAの世界の仲間の一員であるということです。

私がMRAと出会ったのは、ロンドンの経済大学の学生だった一九四六年で、当時は共産主義者の学生であふれていました。私が第二次世界大戦で日本に踏み躙られたマレーシアを後にした当時の気持は、言葉では言い表せません。占領されたということを償ってくれるものは何もありませんでした。侵略した日本人を、私たちの国を見捨てたイギリス人を、打算的で欲深く、戦利品までも狙っているような中国人を憎んでいました。私はこんな憎しみに満ちた心でイギリスに留学したのです。もちろん私は、憎しみを捨て許すというイスラムの教えを頭では分かっていましたが、それを実行することは困難なことでした。しかしMRAに出会い、同じ人間として人を憎む権利はないということを改めて教えられ、その憎しみについて後に日本人に謝罪することができました。

私たちはいかに世界に平和をもたらすかということについて話し合っています。その答えは先ず自分から始めるということです。つまり自分に平和を見い出して初めて、他の人との間に、それがたとえ敵であった

そのままのあなたで
心の安定と強く生きる知恵
百点満点
日本教育新聞社刊
四六判208ページ 定価1200円(税込)
●こころ ●自分を責めないで ●悟り
●自立する ●自己育て、子育て、人育て
●自分も楽しく、家族も楽しく
山崎房一 著

としても、平和を見い出せるということです。

それ以来、私は日本人、中国人、それに四年近く留学したイギリス人と多くの友情を培うことができました。私は日本人ととても気が合うことをお伝えしたいと思います。また、平和な時代になってから日本がマレーシアに多くのことをして下さったということもお知らせしたいと思います。プラトン・サガというマレーシア初の国産車も、日本の助けによるものでした。マハティール首相の「ルック・イースト」政策は広く受け入れられ、大きな成功を収めました。日本企業からも、科学技術を初め多くのことを学びました。私はある日本の建設会社の顧問をしていますが、私はそこでMRAの教えを実践しています。礼節と正直を旨とするこの建設会社をマレーシア政府も高く評価し、大きな信頼を寄せています。こうした信頼関係を築くには、双方が努力を傾ける必要があります。何をするにも先ず自分から始め、そこから家族、隣人、祖国、隣国、そして世界に広がるのです。これは簡単なことではなく、長い時間を要しま〃、先ず始めることが何より大切です。今回のシンポジウムは歴史的な意味を持つことになると思います。

一九九二年の主な活動予定（国内・海外）

一月
- ●MRAインド国際会議「内省、癒し、和解」（インド）
- ●MRA国際チーム、カンボジア訪問（カンボジア）
- ●ラテンアメリカ地域連絡調整会議（ブラジル）

二月
- ●ストックホルム・セミナーIII（スウェーデン）
- ●MRA音楽グループ「希望の歌声」結成（ナイジェリア）
- ●第十八回MRA青年スタディー・コース（オーストラリア）
- ●MRA女性主催会議（ジンバブエ）
- ●コー円卓会議欧州キャンペーン（イギリス、フランス）
- ●第十六回通常総会及び文化講演会（日本）

三月
- ●MRA国際ダイアローグII（インド）
- ●MRAアフリカ地域連絡調整会議（ボツワナ）

四月
- ●ニュージーランドMRA会議（ニュージーランド）
- ●カナダMRA大会（カナダ）
- ●MRAセミナー（ジャマイカ）

五月
- ●第十六回MRA日本キャンペーン（日本）

六月
- ●MRAアジア・太平洋地域連絡調整会議（マレーシア）
- ●MRA音楽会議（ポーランド）
- ●MRA家族会議（アメリカ）

七～八月
- ●国際カンボジア青年会議（オーストラリア）
- ●第四十六回MRAコー世界大会（スイス）
- ●第三回アジア・太平洋キャンプ（APC）（台湾）

十月
- ●MRA国際チーム連絡調整会議（カナダ）
- ●第十五回MRA関西秋季大会（日本）
- ●九州MRA協力会第二十二次訪韓団派遣（日本）
- ●MRA太平洋国際会議（西サモア）

十二月
- ●第十七回通常総会及び文化講演会（日本）

※この他にも東京及び関西で月例会を開催いたします。

事務局近況

●イギリス、インド、インドネシア、オーストラリア、韓国、スリランカ、台湾から十三名の海外代表、及び日本在住の外国人の方々（韓国、カンボジア、台湾、中国、ハンガリー、ベトナム）約三十名を迎えて行われた一九九二年度MRA日本キャンペーン「より良い地球社会の実現を目指して」は、五月九日から十日にかけて小田原のアジアセンターで行われた第十六回MRA国際会議を皮切りに、大阪、神戸、東京、浦和など各地を訪れました。今回は「新しい時代に求められるアジアの役割」というサブテーマの下、民族問題、貿易摩擦、南北問題、地球環境問題など様々な課題を抱える地球の未来のために、私たち一人ひとりがいかにして平和と繁栄に貢献していけるかということを、アジアを初め各国からの友人たちと話し合いました。詳しくは次号のレポートでお伝えします。

●第四十六回コー世界大会は、去る七月三日の開会式「障壁の打破、分裂の修復（多数派と少数派）＝将来におけるヨーロッパの役割＝」に続いて、都市問題会議「都市の未来―人間的要因からの視点」、青年会議「壁を打ち破れ！」、教育・家族会議「変わりゆく世界の中で何を学び何を教えるか―モラルと精神的側面から―」、地域問題会議「危機に直面する地域、危機から脱出しつつある地域―互いの体験に学ぶ」、産業人会議「市場経済に必要な道義的基盤」、日米欧財界人コー円卓会議「日米欧―競争と協調」、そして閉会式まで、六十日間近くにわたって開かれています。また、台湾ではアジア・太平洋MRA青年キャンプが今月下旬から十日間の日程で行われ、日本からも参加します。その体験や感想を聞かせて頂くコー世界大会及びアジア・太平洋MRA青年キャンプ報告会を九月に開催する予定です。日時、会場等のご案内は後日させて頂きます。お気軽にご参加下さい。